KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY CULTURAL PROPERTIES RESEARCH REPORT 2007

京都橘大学　文化財調査報告　２００７

牧野車塚古墳・熊ヶ谷３・４号墳

2008年３月
京都橘大学　文学部

はじめに

本学の文化財学科は、1996（平成８）年に設置申請し、同年12年に認可され、1997（平成９）年４月より開設された。その設置理由を当時の門脇禎二学長は「①文化財・伝統文化を尊重する心と専門的知識・技能の基礎を身につけて、研究者・職業人をめざしたりあるいはすぐ社会生活に入る学生の育成と、②体系的な「文化財学」の創出をめざす研究の進展、を目的においた」とした。

そのうちの専門的知識・技能の基礎を身につける一環として、本学では2000（平成12）年３月から京都市伏見区にある法琳寺跡の測量調査以降、発掘調査を継続し、多くの学生が参加し、調査の方法を学んできた。その成果は『法琳寺跡発掘調査報告』として2007（平成19）年３月にまとめて報告、発行した。

本年度からは、年度ごとに文化財の調査、研究成果をまとめて報告することで、各回生にも調査から報告書作成までの一貫した流れを体感できるようにした。まずはその手はじめとなる本書を作成するにあたっては、多くの方々にお世話になった。今後とも文化財調査についてのご理解、ご協力、ご指導を賜りますよう、お願い申し上げる次第である。

平成20年３月31日

京都橘大学文学部

例　言

1．本書は、京都橘大学が実施した大阪府枚方市牧野車塚古墳の墳丘測量調査と滋賀県大津市熊ヶ谷３・４号墳の発掘調査の報告と、その調査に関連した「古墳出土の炊飯具形土器」と題する研究論文を掲載したものである。

2．遺跡と遺構は国土座標世界測地系によってその位置を示した。

3．本文の執筆は、はじめにと第１章第３節を一瀬和夫、第１章第１・２節を高橋裕子、第２章を堂ノ本智子、第３・４章を青井美稚子があたった。

4．本書の編集は、一瀬和夫が担当し、各執筆者がこれを助けた。

5．調査にあたっては、大阪府教育委員会、枚方市教育委員会、財団法人枚方市文化財研究調査会、関西大学考古学研究室、京都府立大学考古学研究室、滋賀県教育委員会、大津市教育委員会、小川裕見子、土屋みづほ、三好　玄、大竹弘之、西田敏秀、米田文孝、菱田哲郎、細川修平、吉水眞彦、福田　敬、桐畑弘嗣、梶原大義、森下浩行、奥村弥恵をはじめとする関係機関、諸氏諸嬢にご高配を賜った。記して感謝したい。

目　次

はじめに・例言
第１章　2007年度の調査経過……1
第２章　牧野車塚古墳測量調査……3
第３章　熊ヶ谷古墳３・４号墳発掘調査……7
第４章　古墳出土の炊飯具形土器……16
報告書抄録

第１章

2007年度の調査経過

１．牧野車塚古墳測量調査

牧野車塚古墳は大阪府枚方市車塚１丁目に所在する周囲に周濠・外堤を備えた淀川左岸でも屈指の規模を誇る前方後円墳である。1922（大正11）年に国史跡指定を受けている。

築造時期は従来、５世紀初頭～前半とする説が多数を占めていたが、2004（平成16）年度に実施された第２次調査で、出土埴輪などから４世紀後半以前に遡ることが確実となった。墳丘などからさらに遡る特徴が見られることから、関西大学・京都橘大学・京都府立大学・財団法人枚方市文化財研究調査会の４者が新たに牧野車塚古墳研究調査団を結成し、その実態究明に取り組むこととなった。

牧野車塚古墳に対する調査研究は今後も継続する予定で、来年度は測量の補足と地中探査を計画している。

調査は調査主任を猪熊兼勝・一瀬和夫とし、2007（平成19）年７月30日から８月10日に現地調査を実施した。

参加者は、青井美稚子、堂ノ本智子、池本佳彦、高橋裕子、田中如子、本田雅史、山内沙織、松井綾子、松浦未春、三井　彩、今津友紀子、酒井裕加、田口五基であり、内業調査のみの参加者は、江藤　梓、荻野允子、小野昌子、川口賢人、下堂文寛、高橋加世子、名手寿崇、福田沙織、森真奈美、山口　巧、山田昌恵、北田麻衣、吉川三奈美、北川正人である。

２．熊ヶ谷３・４号墳発掘調査

京都橘大学文学部文化財学科では、大学周辺の地域史の把握・理解・研究を行うとともに、それらの保護・活用に向けての提言をもめざしている。そのための一つとして、保護・活用のために詳細な把握が求められる大学周囲の遺跡についての確認作業と、埋蔵文化財において地域貢献できる人材の育成を考えている。

2007年度については、以下の目的で滋賀県大津市に所在する熊ヶ谷３・４号墳の発掘調査を実施した。

大津市北側には曼陀羅山・春日山・日吉・穴太野添・百穴古墳群といった大型群集墳が群在し、数多く横穴式石室が開口していることは周知の通りである。それらは６・７世紀を中心としたものであり、丘陵南斜面に位置する場合が多い。またこれまで、山麓では太鼓塚・大通寺古墳群といった発掘調査が実施され、これらも横穴式石室を中心とすることが分かっている。これら横穴式石室は開口しているという時点でその性格と大まかな時期は把握・確認できる状況にある。にもかかわらず、おそらく立地的にはそれらに先行するであろう尾根頂部を占有する古墳についての知見は必ずしも明らかではない。

こうしたことから、丘陵稜線上や丘陵斜面、山麓といったところに立地する相互の古墳群との関係を把握することは、大津市北側の湖西の古墳形成を知り、それら総体として保護措置を図る際にも、必要不可欠なことと考える。

2007（平成19）年７月７日に京都橘大学は文化財保護法第92条第１項の規定に基づき、滋賀県教育委員会あてに埋蔵文化財発掘調査の届出を出した。

その届出の回答として、滋教委文保1500号の通知があった。「滋賀県における行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準」等、関連法令等を遵守すること。調査計画および調査体制に変更が生じた場合は、速やかに協議すること。現地調査が終了後、速やかに調査報告書および埋蔵物発見届・埋蔵物保管証を提出すること。文化財保護法105条に拠る土地所有者としての権利が放棄されていることを確認すること。その他、滋賀県教育委員会および大津市教育委員会の指示に従うこととあった。

以上の条件のもと、調査主任を猪熊兼勝・一瀬和夫として、2007（平成19）年８月20日から９月20日まで現地調査を実施することになった。

参加者は、青井美稚子、高橋加世子、森真奈美、山内沙織、紺野辰一、坂本聡美、西山裕矢、松井綾子、松浦未春、三井　彩、若杉弥生、阿部栄幸、川田桐子、酒井裕加、田口五基、中山尚恵である。

３．2007年度遺跡調査の参加学生に対する考え方

学生が在学中に自分の専攻することについて、夏期休暇を利用した長期間に連続した体験をもつことは、学生ならではというすごし方と言える。そして、その体験が卒業後に直接生かすことができたのなら、そのまま就業体験にもつながる。

今年の夏、文化財学科では遺跡調査にかかわるプログラムについて、２通りの呼びかけをした。一つは宇治市・城陽市・大阪府教育委員会などの行政機関等の発掘調査（行政調査）に非常勤職員として参加させていただ

くというもので、もう一つは計５週間の古墳の墳丘測量と発掘調査（大学調査）を本学で実施するというものである。

行政調査は文化財学科３回生を中心に休暇期間に１月以上続けて調査に参加できることを条件にして呼びかけた。それは手間のかかる雇用契約手続きが必要であることやその期間が満たされないときに紹介範囲がせばまること、トレーニングされていなければ調査担当者が毎日の仕事の指示をその学生のためだけに時間を割くことになり迷惑がかかるという理由からである。一方で、学生が通いやすい、希望に沿うような調査現場もあたらさせていただいた。むろん、紹介した学生以外でも、行政調査に自己努力で通っている学生もいる。それは４回生が中心だが、実家の町や長期休暇を問わず日常継続してお世話になっている１～３回生もいる。

大学調査の方は、数日しか日程がとれないものから、直前や調査中でも自由に参加できるような条件にした。集中講義やインターンシップなどといったものの日程が１ヶ月前に学生の側で読めない場合もあるからだ。１～３回生を中心に声をかけた。うち、４回生はリーダーとして、また調査する古墳が卒業論文と重なる学生が参加した。本来、大学院生が発掘調査のマネージメントを学習できるようにした方がよいのであるが、現状では確保できていない。ともかく、大学調査はそのまま発掘調査の基礎を体得することができ、長期参加すれば発掘の一通りの流れを短期間で体験できる利点がある。とくに、低学年がマスターすれば、在学後半期に自分の研究にそった発掘現場に、調査主体者をわずらわせることなく、一人で充分に参加できる。そして、他大学生との接点や就職情報なども得やすい環境になるであろう機会に恵まれる可能性がある。

調査に最も有効な基礎トレーニングは等高線をまわす平板測量である。これは測量・実測の基本要素を学ぶことができ、複数人数で作業することから互いのコミュニケーションを通じてチームワークを育てることにもつながることにもなる。これを一通りこなすために、ふつう少なくとも３日間はかかる。「考古学実習の平板はなんやったんや」とマスターした学生は言う。「授業で平板測量に１時間ほどしか割り当てにくい。現場で作業する３日間は15時間分に匹敵し、それで前期は終わってしまうじゃないか」ということになる。

一方、行政調査はその体験がそのまま埋蔵文化財関係の仕事の情報に結びつく。また、人間関係、考古学や現場指導を中心に、それぞれがその発掘調査した遺跡の情報を大学にもちよることによって、大学という場で、相互に知識を得ることや個々に得たテクニックの比較、それらを検討、議論して刺激しあうことができる。そして、何よりにもまして、資料を実見することは刺激となり、文献をひろい集め、考えて、レポートや論文へとつなげていける。思考のきっかけにおおいに役立つことになるはずである。

こうした何ものにも代えがたい在学中の体験と地力をつけていける利点が遺跡調査参加には備わっているものと信じる。

来年度は夏期に予定している調査の中で６日間以上とそれに伴う平板測量の予備実習に参加することで、「文化財調査実習Ｉ」という授業を組み込むことも計画している。

写真１　牧野車塚古墳測量調査風景

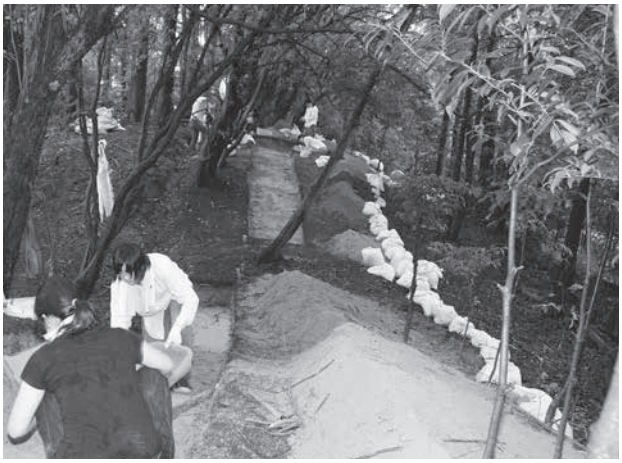


写真２　熊ヶ谷３・４号墳発掘調査風景

第２章

牧野車塚古墳墳丘測量調査

はじめに

牧野車塚古墳は、大阪府枚方市に存在する。周囲３方を穂谷川、淀川、天野川に囲まれており、標高22m余りの交野台地の北西部に営まれた前方後円墳である。これまで、その築造時期は、古墳時代中期前半（５世紀前半）と考えられてきたが、2004（平成16）年度の調査で古墳時代前半（４世紀後半）以前にさかのぼることが確実となった。そのほか、この古墳に不明な点が多いことから、今回、関西大学・京都橘大学・京都府立大学及び財団法人枚方市文化財研究調査会の４者が牧野車塚古墳研究調査団を組織し、更なる実態の解明に取り組むこととなった。

今年度は、まず牧野車塚古墳の墳丘本体を中心とした測量調査を行った。

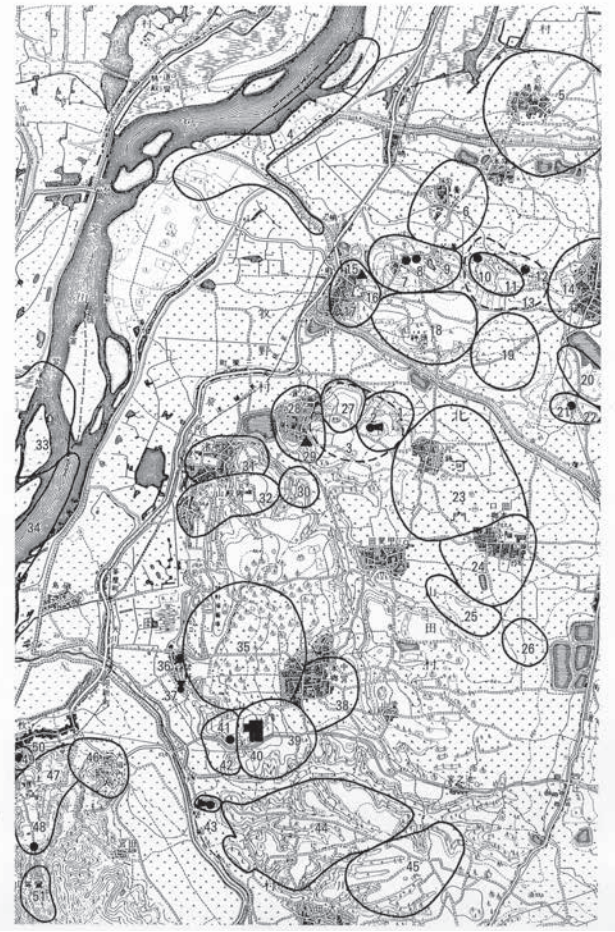
１．牧野車塚古墳の概要

牧野車塚古墳は、外堤を含めた規模が北河内地域において最大の規模である。前方部を東に、後円部を西に向けており、その原型は十分に保たれている。故に、容易に墳丘の現状を観察することができる数少ない古墳である。そのため、1922（大正11）年３月に国史跡として指定されており、周囲を公園として整備していることから、墳丘内には自由に立ち入ることができる。

牧野車塚古墳の周辺には、現在は削平されているが、塚名小字より子供塚、権現塚、赤塚、ショーガ塚などの古墳が存在していたと思われる。このことから、車塚古墳を中心とした、古墳群を形成していたと考えられた。

また、その付近一帯には多くの遺跡が存在している。小倉東遺跡は牧野車塚古墳の北側に隣接し、弥生時代から平安時代中期にかけての複合遺跡である。５世紀と６世紀後半から7世紀初頭の小規模な古墳も多く検出された。さらに離れると、牧野車塚古墳と同じく、北河内地

図１　牧野車塚古墳の位置



1 小倉東遺跡　2 牧野車塚古墳　3 牧野平塚古墳群　4 淀川河床遺跡
5 船橋遺跡　6 養父遺跡　7 宇山１号墳　8 宇山２号墳　9 宇山遺跡
10 養父古墳　11 養父丘遺跡　12 比丘尼塚古墳　13 養父古墳群
14 招提寺内村遺跡　15 牧野阪瓦窯跡　16 牧野阪古墳　17 牧野阪遺跡
18 九頭神遺跡　19 招提中町遺跡　20 招提今池遺跡　21 日置山古墳
22 日置山遺跡　23 交北城の山遺跡　24 田口中島遺跡　25 甲斐田新町遺跡
26 出屋敷西遺跡　27 小倉遺跡　28 アゼクラ遺跡　29 粟倉瓦窯跡
30 渚東遺跡　31 渚遺跡　32 御殿山遺跡　33 前島遺跡
34 淀川河床遺跡（その２）　35 禁野本町遺跡　36 白雉塚古墳
37 禁野上野古墳　38 中宮尼寺田遺跡　39 百済寺遺跡　40 百済寺跡
41 注具ドンバ墳丘墓　42 中宮ドンバ遺跡　43 禁野車塚古墳　44星丘西遺跡
45 星丘遺跡　46 岡東遺跡　47 枚方上之町遺跡　48 枚方小学校南方古墳
49 万年寺山古墳　50 万年寺山遺跡　51 鷹塚山遺跡

図２　牧野車塚古墳の周辺遺跡分布図（小倉東遺跡Ⅱより）

域において最大規模の前方後円墳である全長110mの禁野車塚古墳、奈良時代後期に建立された百済寺跡などが存在する。

既往の調査として、1978（昭和53）年に後円部西側外堤隣接地で実施されている第１次調査と、2004（平成16）年度に前方部墳丘と周溝で実施された第２次調査のみで、ほとんど調査が行われていない状態である。

第１次調査では、外堤に沿う形で弧状に巡る幅４～５m、深さ20～30㎝の溝状遺構が検出された。溝の中から２基分の円筒埴輪列が約10㎝間隔で検出されるという成果であったが、詳細は不明である。この結果より牧野車塚古墳は２重の周溝が巡る古墳と認識されたが、後年の調査の結果、検出された溝は外堤の外側を画する浅い溝（外堤外周溝）とされた（注１）。

第２次調査は、古墳内に対する初の本格的な調査であった。墳丘部では板石が小口積みにされるという極めて特異な葺石が検出された。石材は、結晶片岩、紅簾石片岩、石英斑石、輝石安山岩などで、石材産地は、徳島県吉野川流域、兵庫県猪名川流域、二上山と報告されている。しかし、その葺石が墳丘全体に及んでいるのかどうかは不明である。また、周溝の形より、墳丘が鍵穴形であることがわかり、出土埴輪（鰭付円筒埴輪）などから見て、それまで５世紀前半と考えられてきた築造時期が、古墳時代前期にさかのぼって位置づけできると考えられた（注２）。

先述した小倉東遺跡の第32次調査では、後円部北側で外堤外側と目される浅い溝状の遺構が、周溝北東部隅外側より周溝と考えられる遺構の一部が検出された（注３）。

古墳の内部構造に関する本格的な調査は行われておらず、詳細なことは今なお不明なままである。今度の測量調査で、墳丘の全容が明らかにされることが期待された。

２．測量調査の所見

これまで、牧野車塚古墳の墳丘測量図は、1966（昭和41）年に枚方市史編纂事業として実施されたものと、それに先行して大阪府教育委員会事業として奈良国立文化財研究所（現、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所）が実施されたものがあった（注４）。しかし、いずれの測量図も１mコンタで作成されており、より詳細な測量図が求められるところであった。

今回の測量調査は、牧野車塚古墳の史跡公園内及び周囲を範囲とした。世界測地系に基づく基準杭を墳丘に設置し、20㎝コンタによる縮尺1/100の平板測量、それと平行してトータルステーションによるデジタル測量を実施することになった。調査杭の座標は以下の通りである。

Ａの座標－Ｘ・129350.853、Ｙ・30295.657
b1の座標－Ｘ・129348.262、Ｙ・30262.812
a3の座標－Ｘ・129388.319、Ｙ・30299.381
a5の座標－Ｘ・129360.436、Ｙ・30305.461
a8の座標－Ｘ・129336.908、Ｙ・30283.592

既存のデータによると、全長107.5m、後円部径54.5m、後円部の高さ8.5m、前方部幅44m、前方部の高さ5.5mを測っていた。今回、調査した結果、全長は変わらないものの、後円部径58m、その高さ8.2m、前方部幅45m、その高さ６m（第２次調査のデータを加味すれば6.5m）を測り、既存のデータより、それぞれ変化し、最大3.5mの差があった。

このことから、後円部高より前方部高が2.2m低く、後円部径58mに対して前方部幅が45mと13mの差が、また、くびれ部高は北側23.1m、南側21.9mと低くなっている。周溝は以前より深さの違いが指摘されていたが、今回、後円部側南西部分が24.5m、前方部側南東部分が21.3mと3.2mものレベル差が認められ、墳丘裾は築造当初から水平は揃えられていなかったと考えられる。

明確な前方後円形にまわる周溝と、それが後円部南西の丘陵地形を充分に切断できていないこと、溝の高さの比など、これまで述べてきた諸特徴は、１で述べた出土埴輪や葺石の形状と同様に、牧野車塚古墳の築造時期を４世紀代にさかのぼることを示すものと考えられる。

測量図から、後円部北側と前方部で幅のせまいテラスが確認できることから、後円部南側を除いて、二段築成の墳丘であった可能性が高い。また、従来、外堤とされていた部分にあたる後円部南東に方形状の、前方部南東に円形状の小規模な墳丘状隆起が存在することがわかった。くびれ部両側、後円部北西に渡土堤と思われるものも存在する可能性が高まった。

こうした成果を得たことで、来年度は、周辺測量の充実とともに不安定な状況である周溝底部分や外堤部分を中心として、地中探査を行う計画となった。これらの所見によりさらに詳しい情報が入手できるものと期待できる。

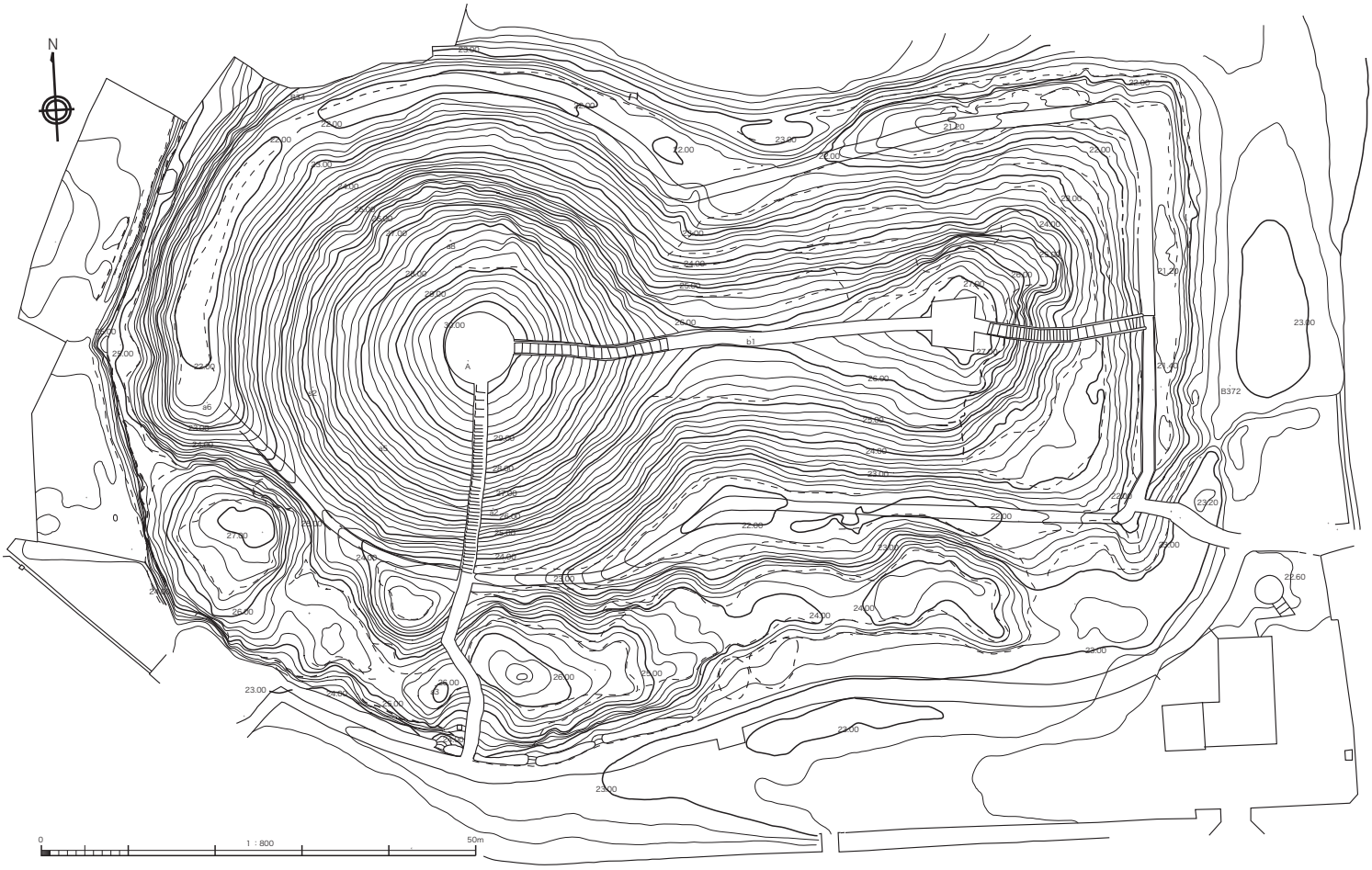


図 3　牧野車塚古墳　墳丘測量図

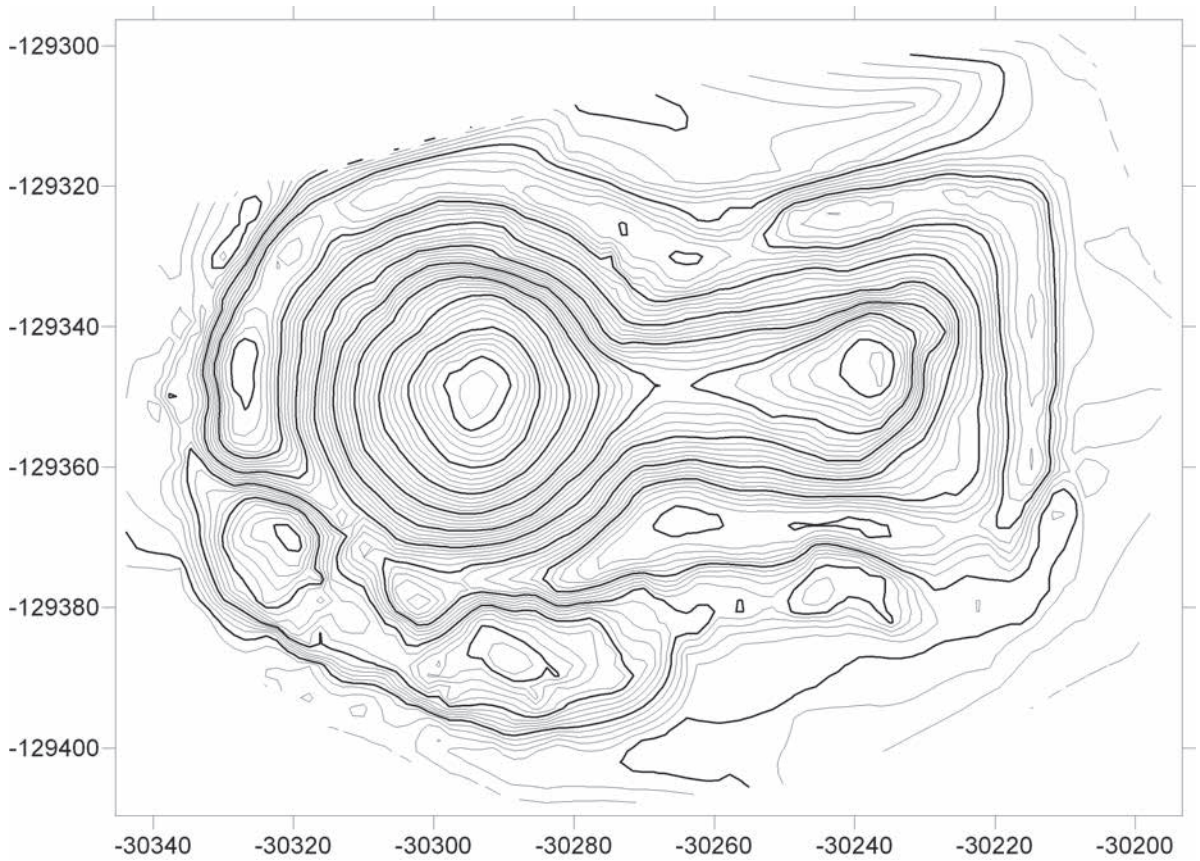


図 4　牧野車塚古墳　デジタル墳丘測量図

おわりに

今回の調査により、詳細な墳丘測量図が得られたとともに、牧野車塚古墳のより細かな築造時期などが検討することができた。今後の課題はまだまだあり、更に調査を行い、牧野車塚古墳の研究を進めていきたいと思う。

注

（1）（2）枚方市文化財研究調査会『史跡　牧野車塚古墳　第2次調査』2005年3月
（3）同上『小倉東遺跡』Ⅱ　2006年3月
（4）枚方市史編纂委員会『枚方市史』第1巻　1967年

写真3　牧野車塚古墳　後円部南西部の古墳状隆起（北西より）

写真4　牧野車塚古墳　後円部南西部の古墳状隆起（東より）

写真5　牧野車塚古墳　前方部古墳状隆起（東北東より）

第３章

熊ヶ谷３・４号墳発掘調査

１．歴史的環境

比叡山東麓（坂本～錦織）は滋賀丘陵と呼ばれる低い台地が琵琶湖西岸近くまで迫り、平地が狭いという特徴的な地形をしている（図11参照）。

この地域は縄文時代晩期の滋賀遺跡などがあり、古くから生活が営まれていたことが分かっている。そして弥生時代には、南滋賀遺跡などにおいて土器や方形周溝墓が検出され、古墳時代には前方後方墳と推測されている赤塚古墳が滋賀里遺跡に西接した位置にある。歴史時代には崇福寺跡・南滋賀廃寺などがあり、各時代を通して数多くの遺跡が存在しており、そこに穴太村主・大友村主・志賀漢人・錦織村主など、渡来系氏族が多く存在してことは『新撰姓氏族』をはじめとする古代文献からも知られる。

中でもこの地域で注目すべきものの１つは、６世紀代（古墳時代後半）に築造された古墳である。滋賀丘陵の南～南東斜面には後期古墳が密集しており、約1000基を越える。これらの古墳のほとんどは群集墳であり、数多くの横穴式石室を内部主体とする古墳が群在する。この地域の古墳は数の多さや密集していることだけでなく、第４章でも述べるように横穴式石室の形態や副葬品にも特徴がある。

図５　熊ヶ谷古墳群調査位置図

２．既往の調査

そうした群集墳のひとつである熊ヶ谷古墳群は、1983～1985年に同志社大学実習生により、測量調査に加えて石室の実測などが行なわれ、『古代学研究』113・114号において報告されている。今回調査を行った３・４号墳の測量調査の方では、３号墳は185mラインで墳丘部平坦面を形成し、墳丘基底については183mライン付近と推定しており、規模は基底部で19m前後、高さ1.8mを測る円墳とする。４号墳は186～186.75mライン付近で墳丘部平坦面の両辺を形成しており、細長い隅丸方形状を呈する。墳丘基底は、183.25m付近まで墳丘として整形され、長径29m、短径11m、高さ3.2mを測る円墳であるとする。両古墳とも内部構造については、木棺直葬墳である可能性が高いとしている。そして、立地・規模等において斜面の一群より好条件にあり、３・４号墳は斜面の一群より先行して築造されたとする。

出土遺物には該当する古墳は分からないが、土師器のミニチュアカマド、須恵器があり、須恵器の時期については６世紀初頭に位置づけている。

３．調査の目的

熊ヶ谷古墳群は大津市滋賀里に所在する。この古墳群の尾根の南側には百穴古墳群、また周辺には太鼓塚古墳群、大通寺古墳群など６世紀代の横穴式石室を内部主体とする古墳が数多く存在している。これらの横穴式石室は石室形態などから大まかな時期を把握・確認することができる状況にある。しかし、おそらく立地的に先行するであろう尾根頂部に占有する古墳について主体部が露わでない分、大まかな時期すら知ることができない。この地域の古墳群の構成も古墳時代後期の横穴式石室であり、他の内部主体とする古墳は一部の竪穴式小石室をのぞいてほとんど確認されていないのが現状である。

熊ヶ谷古墳群は10基の古墳から構成され、うち８基が横穴式石室であることが分かっている。しかし前述したように、尾根上にある３・４号墳の２基は円墳であること以外には何も分かっておらず、その性格の把握は困難である。調査を行うことで、墳丘の土器等の状況や内部

主体の状況を確認することで斜面に立地する古墳とはじめて同様な条件での比較が可能となる。

また、そうした事例がひとつでも提示できるのであれば、周囲の丘陵稜線上や丘陵斜面、山麓といったところに立地する相互の古墳群との関係を推測する手立てとなる。そして、それを把握することはひいては大津市北側の湖西の古墳形成を知るために必要不可欠なものになると考える。

以上のような課題について、今度、３・４号墳に最小限のトレンチを設けて調査を行い、内部主体の構造を明らかにすることを目的とした。

４．調査区の設定

墳丘の盛土の状況、３・４号墳の築造の新旧関係を調べるために、３・４号墳にそれぞれ墳丘頂から墳丘裾まで幅１ｍの３－Ａトレンチ（３号墳）、４－Ｂトレンチ（４号墳）を東西方向に設置した。そして主体部に伴う墓壙を確認するために、３号墳は３－Ａトレンチと平行する３－Ｃトレンチを設けた。４号墳も墓壙を確認するために４－Ｂトレンチに直交する４－Ｂ拡張トレンチを南北方向に設けた。

そして測量のために15箇所ポイントを設置した。

点ａは３号墳の墳頂部でX＝－105863.840　Y＝－13455.867、点ｂは３－Ａトレンチ南側でX＝－105870.895　Y＝－13454.994、点ｃは点ａの東側でX＝－105861.948　Y＝－13448.904、点ｄは４－Ｂトレンチの南側でX＝－105870.537　Y＝－13473.352、点ｅは３－Ａトレンチの南側でX＝－105869.403　Y＝－13460.936、点ｈは４号墳の墳頂部でX＝－105866.082　Y＝－13480.418、点Ｏは３号墳と４号墳の間でX＝－105864.010　Y＝－13461.177、点Qは４－Ｂトレンチの北側でX＝－105864.098　Y＝－13470.281である。

５．層　　序

３号墳

３－Ａトレンチ東西断面

墳丘頂の地表面はT.P.185.500m前後であり、第１層は４cm前後の厚さの腐喰土である。第２層は自然堆積によるもので最大厚34cmであり、茶褐色の砂質シルトである。第３・４層は墳丘盛土であり、暗茶褐色の砂質シルトである。第５層は地山面であり、T.P.184.530m～184.000mまで地山が認められた。

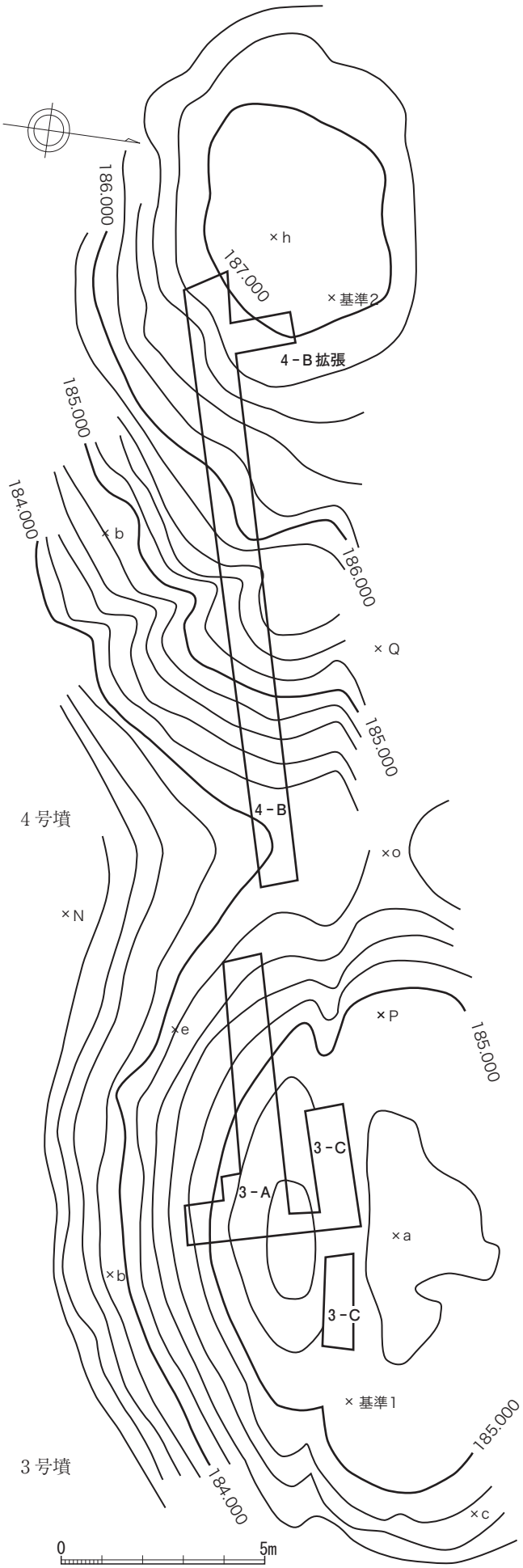


図６　熊ヶ谷古墳群墳丘測量図

第６層～第８層も墳丘盛土であり、外側から中側に向かって盛土をしていることが分かる。第５層は淡褐色の砂質シルト、第６層は黄褐色の砂質シルト、第７層は赤茶褐色の砂質シルトである。第８層は淡茶褐色の砂質シルトであり、白色小礫を多数含んでいる。第９層は淡褐色の砂質シルト、第10層は黄茶褐色の砂質シルトである。第11～13層は墓壙の埋土であり、木棺の陥没によって層が分けられる。第11層は暗茶褐色の砂質シルト、第12層は淡褐色の砂質シルト、第13層は淡褐色の砂質シルトであるが、主体部の上面にあたるためにオレンジ色のブロック土を含む。

３－Ａトレンチ南北断面

第１層は墳丘表土で、第２層は撹乱層である。第３層～第６層は墳丘の盛土であり、第３層は黄茶褐色の砂質シルト、第４層は茶褐色の砂質シルト、第５層は茶褐色の砂質シルト、第６層は暗茶褐色の砂質シルトである。第７層・第８層は撹乱層である。第９層は墳丘盛土であり、淡茶褐色の砂質シルトで小礫を含んでいる。

３－Ｃトレンチ南北断面

第１層は墳丘盛土であり、黄茶褐色の砂質シルトである。第２層・３層はともに墓壙の埋土であるが、おそらく木棺の陥没によって層が分かれると考えられる。第２層は淡茶褐色の砂質シルトであり、第３層は淡褐色の砂質シルトである。第４層も墓壙の埋土であり、木棺の上層にあたる。T.P.185.000m前後に垂直に落ちるラインが確認される。第５層・６層もともに墓壙の埋土である。第５層は暗茶褐色の砂質シルトであり、第６層は淡褐色の砂質シルトである。第７層は墳丘盛土であり、黄茶褐色の砂質シルトである。

４号墳

４－Ｂトレンチ南北断面

墳丘頂の地表面はT.P.187.200m前後であり、６㎝前後の厚さの腐喰土がある。その下の第２層は墳丘崩壊土であり、堆積厚最大15㎝、最小４㎝の粘質シルトの暗灰褐色が続く。第３層は墳丘盛土であり、最大厚30㎝、最小幅２㎝の淡茶褐色の粘質シルトである。そして第２層と第３層との間には、第ａ層と第ｂ層があり、第ａ層は淡茶褐色の砂質シルトで白粒が混じる。第ｂ層は乳白色の砂質シルトで、これらも墳丘盛土である。第４層は、最大厚20㎝の暗茶褐の色強い粘質シルトであり、３号墳の周溝に溜まった３号墳の墳丘崩壊土である。第５層は粘質シルトの茶褐色であり、この層も墳丘崩壊土である。

４－Ｂ拡張トレンチ

墳丘頂の地表面はT.P.187.200前後であり、最大厚10㎝前後の腐喰土がある。第２層は撹乱層であり、赤茶褐色の砂質シルトである。第３層は主体部の上面にあたり、茶褐色の砂質シルトである。第４層は撹乱層である。第５層～第７層は溝であり、第７層の溝のなかに第６層の溝が掘られている。第５層は灰茶褐色の砂質シルト、第６層は暗茶褐色の砂質シルト、第７層は乳白色の砂質シルトであり、こぶし大の礫を含む。

６．検出遺構

３号墳

４－Ｂトレンチ T.P.183.600mの高さを墳丘裾と判断した。この裾を基準に墳丘を考えると、墳丘径21m、高さ2.2m以上の円墳ということになる。そして墓壙は検出した幅2.23m、長さ2.78m（確認部分）であり、墳丘中心から折り返して復元すると長さ7.48mに及ぶと推定される。３号墳では墓壙ラインとともに、その内側に木棺が腐食して崩壊した際の陥没ラインが確認できた。陥没ラインの内側に棺の木材が残っていなかったが、木棺の痕跡ラインが確認でき、少なくとも幅0.42m以上あることが分かった。主体部の主軸については、ほぼ東西方向に軸をとる。

４号墳

３号墳の裾に墳丘裾が削られたと考えて、墳丘径24m、高さ3.6mの円墳であることが推測できる。墓壙幅1.05m、長さ0.6m（確認部分）であり、墳丘中心から折り返して復元すると4.96mと推定される。４号墳では、内部主体の痕跡を確認しうることができなかったが、小口と思われる部分を検出しており、他の施設の痕跡が確認されていないことから、木棺直葬と考える。

７．築造時期

先のトレンチを設けた調査の結果、３号墳の溝が４号墳の溝を切っており、さらに４号墳の周溝に３号墳の墳丘盛土が堆積しており、このことからも４号墳の方が３号墳より古いということが分かった。また、測量図からも確認できるが、４号墳の丘陵斜面に築造された２号墳は築造の際に４号墳の裾を削っており、４号墳は２号墳に先行して築造されたことが分かる。

そして、墓壙の形状及び墳丘の形状から築造時期が推定できる。３号墳は墓壙の規模、特に幅が大きいため、

５世紀代に築造されたと考えられる。４号墳は墓壙が細長く、尾根頂上に立地することから、４世紀代にさかのぼる可能性もある。

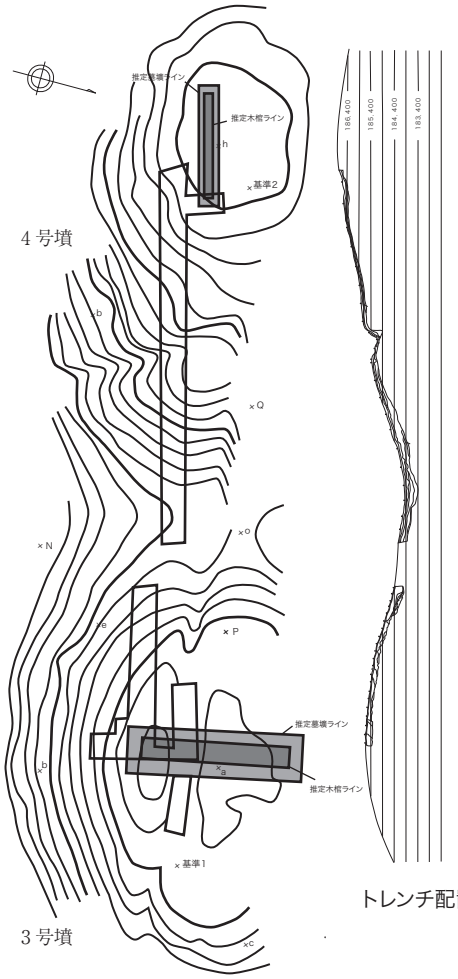
今回、遺物は出土しなかった。しかし、３号墳の周溝からは板状石材が確認された。この板石は石英斑岩である。近くの比叡山で採取されるものであり、自然に割れた板石であった。古墳に伴うものかは判然としないが、産出地から移動していることは確かである。

8．まとめ

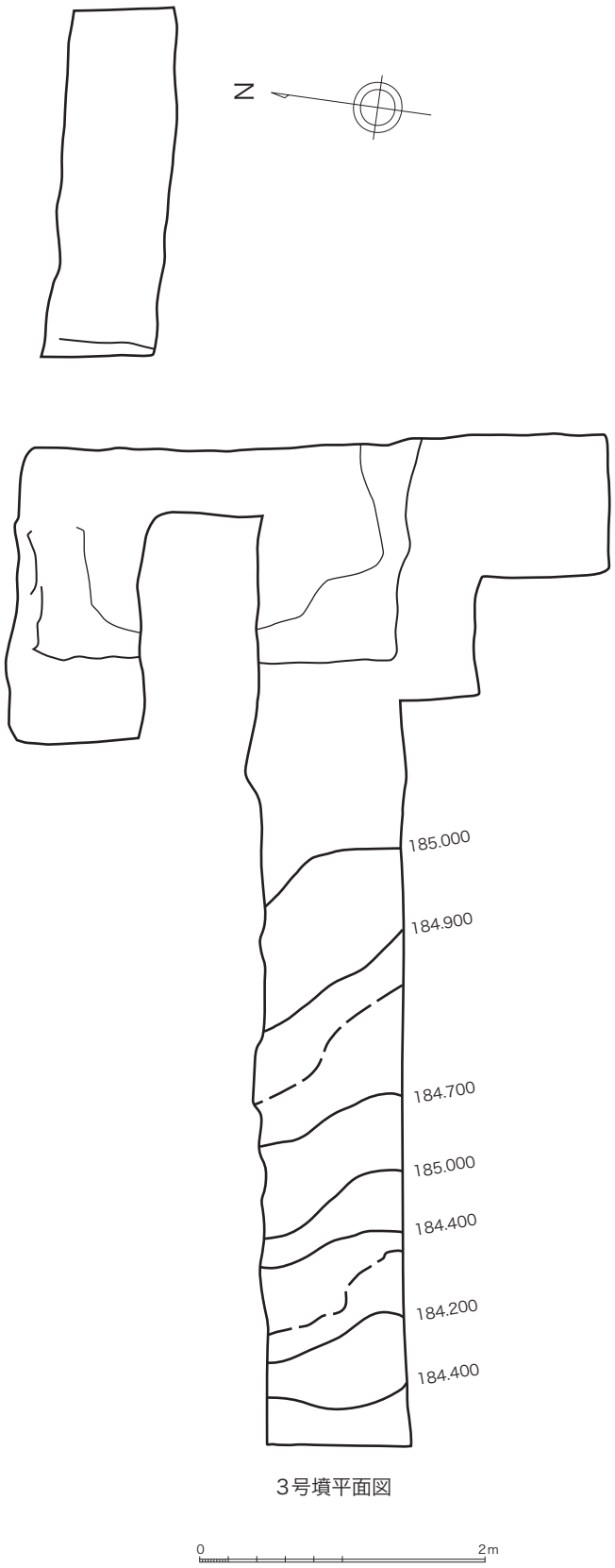
調査の結果、３・４号墳の築造の新旧関係が分かり、また内部主体に一端を確認することができた。３・４号墳ともに木棺直葬と考えられ、４～５世紀に築造された古墳の可能性が強まった。

比叡山東麓は今まで６世紀代の横穴式石室を内部主体とする群集墳が多く注目されてきたが、４世紀や５世紀の群集墳の様相があまり明らかではなかった。

今回の調査成果は、この地域の古墳の様相を知るうえで、新たな資料を提示したといえよう。

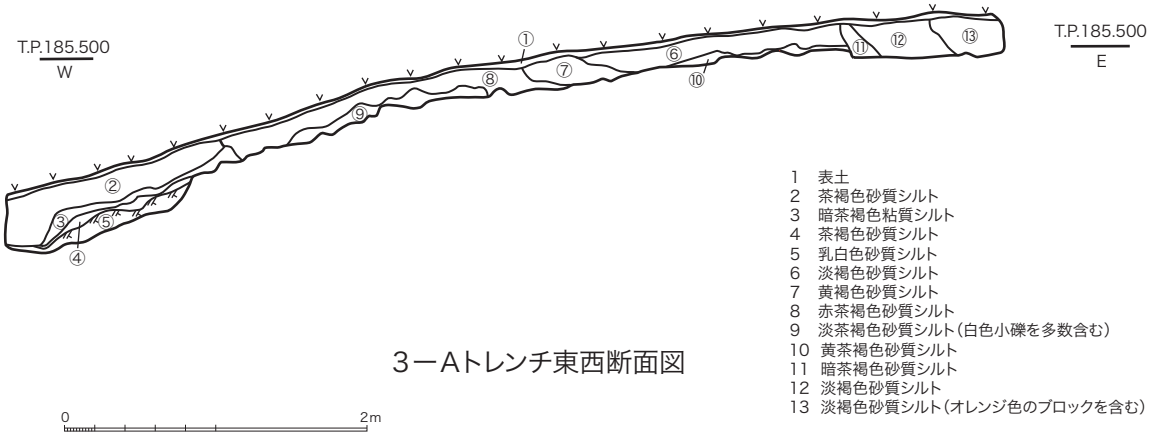


トレンチ配置図



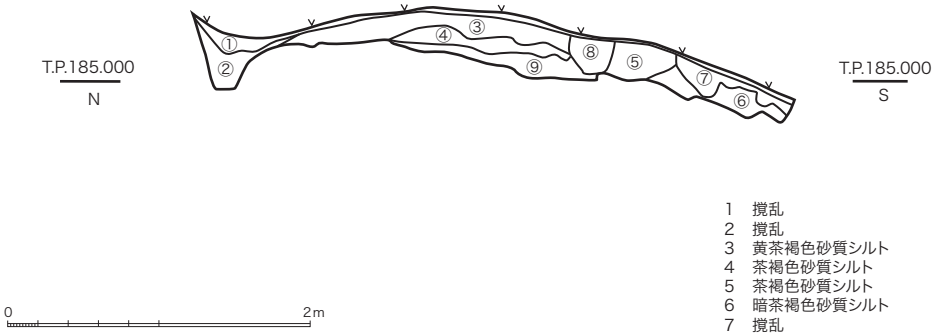
３号墳平面図

図７　熊ヶ谷３・４号墳トレンチ配置と推定墓壙及び３号墳平面図



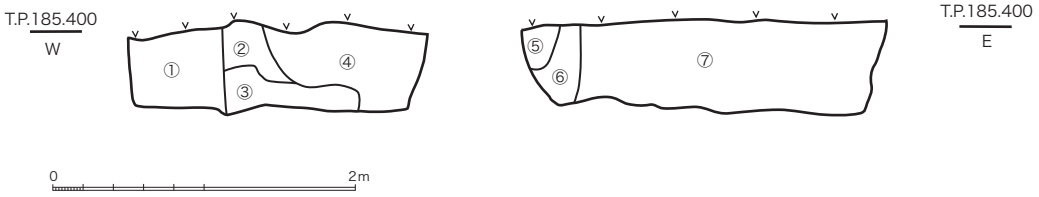
1　表土
2　茶褐色砂質シルト
3　暗茶褐色粘質シルト
4　茶褐色砂質シルト
5　乳白色砂質シルト
6　淡褐色砂質シルト
7　黄褐色砂質シルト
8　赤茶褐色砂質シルト
9　淡茶褐色砂質シルト（白色小礫を多数含む）
10　黄茶褐色砂質シルト
11　暗茶褐色砂質シルト
12　淡褐色砂質シルト
13　淡褐色砂質シルト（オレンジ色のブロックを含む）

3－Aトレンチ東西断面図



1　撹乱
2　撹乱
3　黄茶褐色砂質シルト
4　茶褐色砂質シルト
5　茶褐色砂質シルト
6　暗茶褐色砂質シルト
7　撹乱
8　撹乱
9　淡茶褐色砂質シルト（小礫を含む）

3－Aトレンチ南北断面図



1　黄茶褐色砂質シルト
2　淡褐色砂質シルト
3　淡褐色砂質シルト
4　暗茶褐色砂質シルト
5　暗茶褐色砂質シルト
6　淡褐色砂質シルト
7　黄茶褐色砂質シルト

3－Cトレンチ東西断面

図８　熊ヶ谷３号墳土層断面図

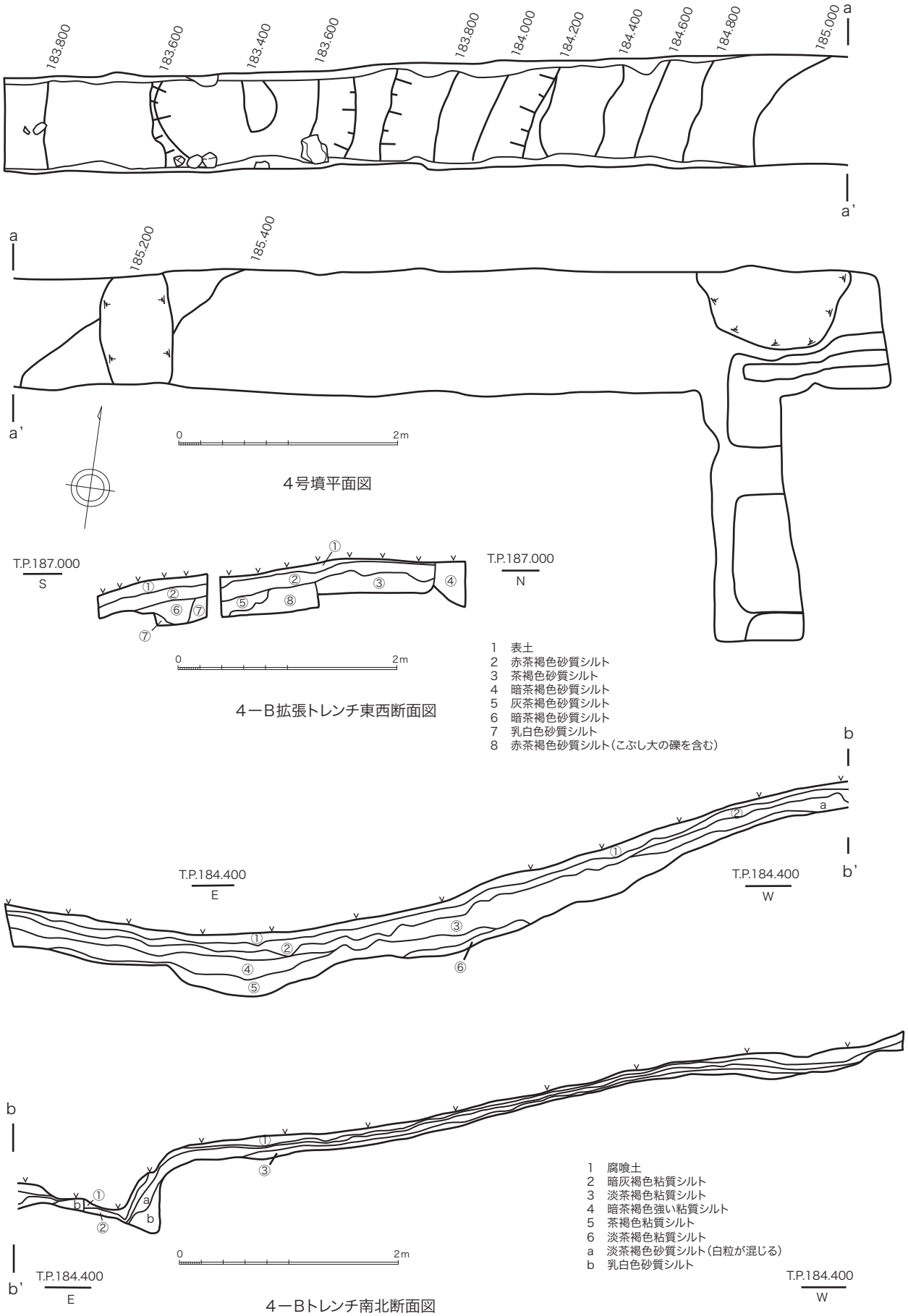


図 9　熊ヶ谷 4 号墳平面図及び断面図

写真 6　熊ヶ谷古墳群遠景
（南東より）

写真 7　熊ヶ谷 3 号墳調査前墳丘状況
（南西より）

写真 8　熊ヶ谷 4 号墳調査前墳丘状況
（東より）

写真９　熊ヶ谷３号墳墳丘状況
３－Ａトレンチ（西より）

写真10　熊ヶ谷３号墳墳丘土層
３－Ａトレンチ（南西より）

写真11　熊ヶ谷４号墳トレンチ
墳丘裾状況

写真12　熊ヶ谷３号墳主体部
（南より）

写真13　熊ヶ谷３号墳主体部
（北より）

写真14　熊ヶ谷４号墳主体部
（東より）

第４章

古墳出土の炊飯具形土器

はじめに

５世紀中頃日本列島に、朝鮮半島や中国大陸から渡来人によって様々なモノがもたらされた。その中に移動式カマドがある。

カマドは「造りつけ」と「移動式」の２種が存在し、移動式カマドは古墳～平安時代の集落から出土しており、大型から小型のものまで様々ある。古墳に副葬された炊飯具形土器（注１）は移動式カマドがモデルとなりミニチュア化することで儀器化された。この炊飯具形土器は近畿地方の中でも、琵琶湖湖西地域、大阪南東部、奈良盆地南部の限られた３地域に集中し、そのほとんどは６世紀を中心とする横穴式石室内から出土する。

本論では熊ヶ谷古墳群と関連する湖西地域を中心に炊飯具形土器の型式分類案を提示した後、炊飯具形土器の実態把握、そこから提起される古墳群及び地域間の繋がりと地域性に及びたいと思う。

１．炊飯具形土器研究の問題

小林行雄氏は、「黄泉戸喫（ヨモツヘグイ）」について、石室内で実際に火を使用した事例があることなどから、「古事記にみられる［黄泉の国の食べ物］を摂ることによって現世との断絶が宣告を意味するのは、たんにそれが黄泉の国の食べ物であるからというだけではなくて、それが黄泉の国のカマドで煮たものであることに重点のあったことを示そうとしているであろうか」と述べる。また死者と告別する儀式が重視されるようになったとき、この土製カマドが作られたのであろうと考えた。そして、炊飯具形土器を石室内に副葬したのは、黄泉戸喫の伝承を行為によって演じるためではなく、器物によって暗示するにとどめたものであるとした〔小林1976〕。

水野正好氏は滋賀県湖西地域の真野・大友・錦部・古市の４郷からなる滋賀郡について、最北を占める真野郷と以南の大友郷・古市郷にみられる出自の相違に注目し、真野郷を和邇系氏族、他３地域を漢人系帰化人とした。この漢人系氏族は５世紀末葉に和邇氏を通じて編貫され、統括氏族の和邇氏は真野郷に居住し、滋賀郡内での住み分けがされたと考えている。これに関連して正方形平面・窮隆頂立面玄室・炊飯具形土器の副葬といった特徴を見出し、これを漢人系氏族の特徴とし、その祖源を朝鮮半島（百済・高句麗）に求めた〔水野1970〕。

その後の研究は炊飯具形土器の型式分類が中心となる。中でも松浦俊和氏や近野正幸氏、卜部行弘氏などの論がその主なものである。

松浦氏は、器体規模・調整手法などにより３型式に分類した。そして６世紀後半→６世紀末→７世紀前半という大筋の型式編年を設定し、器体規模が縮小するにつれて作りが粗雑になるという傾向を導きだした。そして副葬位置から炊飯具形土器の石室内への副葬が他の副葬品と完全に分離していること、また玄門付近に安置することから最終追葬時に行われ、その際に何らかの特別な意味をもたせて納置したもの（墓前祭祀の一形態）と考えた〔松浦1988〕。

この大型から小型へという変遷については、後述する一須賀Ｉ－19号墳や桜井児童公園２号墳の小型のものが最も古くなることから、一概に言えない。そして最終追葬時の埋納とすることも、その追葬者がいかに最終を自覚していたかが問題となる。

近野氏の分類変遷は、各器種の消長を示し、炊飯具形土器の副葬が６世紀後半に集中する傾向を導きだした。また器体規模は、松浦氏の大型から小型へとの変遷を一部認めつつも、逆に小型から大型へという明瞭な変遷を考えた。炊飯具形土器の出土位置は、玄室側壁より、奥壁の前面および隅部などの４つに区分し、復元した棺体の配置と組み合わせて副葬方法を考えた。その結果、副葬行為が特定の人に対して行われたもの・追葬の最終段階で副葬されたもの・墓前祭祀の一形態と認識できるものがあると考えている〔近野1990〕。しかしこれはあまり限定的に特徴を見い出しているとは言えない。

卜部氏は法量、形態などの組み合わせによって23タイプに分類し、その中から地域的な特徴を示すものとして、大津北郊型と奈良南部型の２タイプを設定した。そして１期から５期までに分け、変遷を組み立てた。２地域の特色は、両者とも粘土帯を積み上げて整形した、うえすぼまりの円筒形の体部を持ち、焚口を切り込み全周に庇をめぐらすというのは共通する。その違いは、大津北郊型の方は体部のほぼ中位に突帯を巡らせ、それより幅広の把手を両側に突出させる。器高は15～20cmまでを測るというものである。奈良南部型は器高が15cm前後で、突帯・把手を欠き、把持孔・煙孔が付く場合があるものであるとしている〔卜部1991〕。

これら見解以降に、現在まで資料の増加に伴い、大

和・近江で様々な形態のものが出土する。

２．型式分類

（１）炊飯具形土器の出土分布とその状況

前節でみたように、先行研究にはそれぞれの課題が伴う。大型から小型へ、最終追葬時の埋納なのか、副葬行為の限定、地域性の有無といったものである。以下では、この問題について、まず先行研究で行われた炊飯具形土器の法量、調整、形態について検討し、それに加えて、製作技法、出土位置、古墳群間及び３地域の関連性も注目したい。

そのために全体の状況からみる必要がある。炊飯具形土器は今のところ近江48例、河内20例、大和15例の合わせて83例の出土がある（図10）。その中には、カマド、コシキ、カマ、ナベがあり、それぞれに特徴がある。器種構成はカマド・コシキ・カマ・ナベの４点の組み合わせを基本としており、この組み合わせは、83例中25例であり、最も標準的と考える。次にカマド・コシキ・カマの３点の組み合わせは、83例中15例となる。このような組み合わせで出土することの意識自体が、炊飯具形土器としてセット関係で呼称する最大の理由である。

今のところ古墳出土のものにおいては火をうけた痕跡が確認された例はなく、また器の中に食物が残っていたということはない。83例の中には、河内の奉献塔山２号墳など４例が１石室に２組を副葬しているが、79例は１石室１組を基本としている。また出土数の違いがあるものの、近江・河内ではほとんどが群集墳から出土するが、大和では単独墳にも副葬されるという特徴がある。

（２）琵琶湖湖西地域の炊飯具形土器

近江からは、全体の約60％の炊飯具形土器がまとまって出土することから、まずこの湖西地域に注目し、出土の炊飯具形土器をもとに型式分類の基本となる試案を導き出すことにする。

滋賀県琵琶湖湖西地域［坂本～錦織］（注２）は滋賀丘陵が湖岸近くまで迫り、平地が狭いという特徴的な地形をしている。扇状地では、大壁造り建物や礎石建ち建物、オンドル状遺構などが穴太遺跡などの集落で検出される。この丘陵の南～南東斜面には後期古墳が密集し、約1000基を超える。これらは群集墳として把握され、多くは直径10～15m前後の小規模な円墳で、横穴式石室を内部主体とするものが群在する。

石室の形態には特徴があり、玄室の各壁面は基底石より２～３段目より上に少しずつ内側へ送り出すように積まれ、天井石は１石からなる窮隆頂持ち送り（ドーム状）を呈する。志賀古墳群の群集墳からは炊飯具形土器が多く出土する。それに対して石材を垂直に積み上げた壁面構造を持つ石室が主流を占める湖西地域北（真野～堅田）地域の群集墳からは炊飯具形土器の出土は確認されない。

湖西地域の古墳群（図11）

ここでは、特に炊飯具形土器の出土が集中する湖西地域における各古墳群の概要について述べる。本論では、奥壁から羨門方向をみた時に右側に袖部があるものを右方袖・右側壁、左側のものを左片袖・左側壁とする。

①嶽古墳

穴太古墳群の北端に位置し、両袖式の正方形プランであり、排水溝がある。須恵器の組み合わせから３人前後の被葬者が考えられている。

②穴太飼込古墳群

坂本穴太に所在し、穴太野添古墳群の南に接する。調査された22基のうち、45％にあたる10基から炊飯具形土器が出土する。玄室平面プランは玄室長：玄室幅が0.7：１の両袖式横長のものと１：１の両袖式正方形のものが存在するものの、ほとんどが１：1.5や１：1.7の

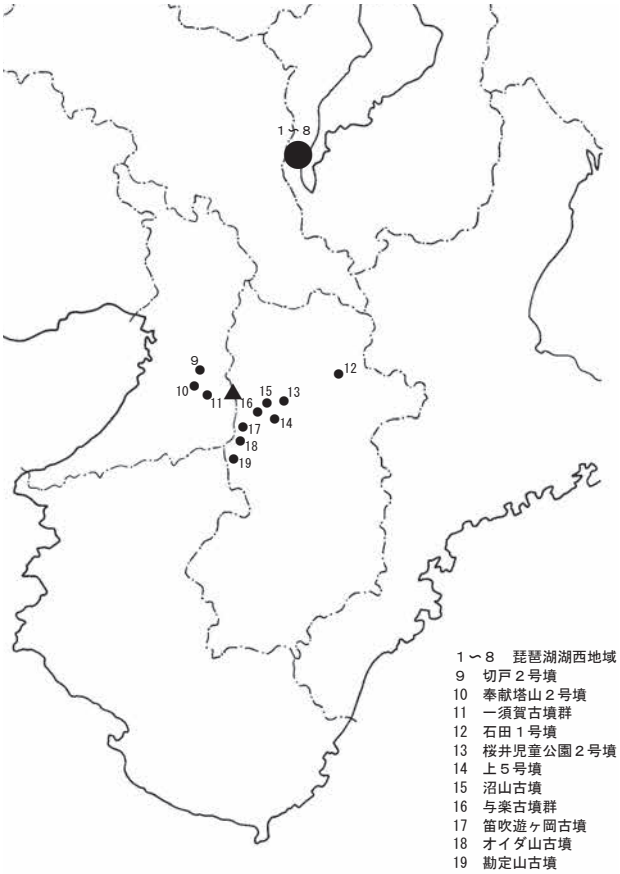


図10　炊飯具形土器の分布図

右片袖式の縦長のものである。そのうち炊飯具形土器のほとんどが縦長の石室から出土する。そして、両袖式・右片袖式どちらにも副葬される。

③大谷南古墳群

大通寺古墳群の東に位置し、８基が調査される。そのうち６基から炊飯具形土器が出土する。

④大通寺古墳群

大津市滋賀里に所在し、北は大谷南古墳群、南は熊ヶ谷古墳群に接する。54基の調査中、９基から炊飯具形土器が出土するが、17％と低率である。玄室の平面プランは、0.8：１の横長のもの、１：２の縦長のものなどがあり、また両袖式、右片袖式、無袖式など様々なものが含まれる。炊飯具形土器は、横長・正方形・縦長のいずれの石室からも出土し、両袖式・右片袖式ともに副葬される。本古墳群の出土品の特徴として釵・耳環・装飾付須恵器などがあるとともに、炊飯具形土器を副葬している他の古墳群での出土がほとんど確認されていない轡・杏葉・帯金具などの馬具の副葬もあげられる。また中には、凝灰岩製の組合式家形石棺が使用された古墳もあり、地域首長墓に匹敵する石室規模や副葬品を有するものが含まれる。炊飯具形土器の副葬が低率なことも気になるところである。

⑤小山古墳群

古墳群の全容は分からないが、炊飯具形土器が１例出土する。石室は１：１の正方形のもので、両袖式石室である。

⑥熊ヶ谷古墳群

大津市滋賀里に所在し、10基の古墳の存在が確認され、今年度に２基の発掘調査を行った。10基うちの８基が横穴式石室であり、ほとんどが両袖式である。玄室比は１：1.6などの縦長のものである。どの石室から出土したかは不明だがカマドが１つ出土する。

⑦太鼓塚古墳群（注３）

大津市滋賀里～高砂町に所在し、滋賀里遺跡に接して約70基の古墳が確認される。そのうち33基の古墳が調査されており、58％の19基から炊飯具形土器が出土する。右片袖式横穴式石室のほかに、竪穴式小石室や土器棺墓も検出されている。石室プランは１：１に近い正方形のものや１：1.5の縦長のもののどちらもが存在する。炊飯具形土器は、窮隆頂持ち送り式の玄室をもつ正方形と縦長の双方から出土するが、縦長のほうが少し多い。また、右片袖式・両袖式どちらからも出土する。特徴的な出土品として、銀製釵と銀製・青銅製腕輪があげられる。また後期古墳以外に、古墳時代前期・中期の遺構、遺物が確認され、韓式系土器の出土もみられる。

⑧福王子古墳群

大津市南志賀に所在し、十数基の古墳が存在する。その中の９基が調査され、４基から炊飯具形土器が出土する。両袖式も存在するが多くは右片袖式で、窮隆頂持ち送り式の玄室である。また１：1.2の正方形に近い平面プランの石室が特徴であるが、多くは１：1.7の縦長のものである。炊飯具形土器は、右片袖式石室からのみ出土し、玄室比が1.2や1.3の石室に多く副葬される。

湖西地域の炊飯具形土器の型式分類

以上のように湖西地域には６古墳群と１単独墳で102基から計48組の炊飯具形土器が集中して出土する。その豊富さと時期の連続性に注目し、出土例の多いものから大きく３型式に分類した。

実用の移動式カマドと比較して、その影響をどの程度受けるかという基準でＡ～Ｃ型式と分けた。

Ａ型式—埋葬用に作られたオリジナルの型式のもの。

Ｂ型式—移動式カマドの影響を受けつつもオリジナルの型式のもの。

Ｃ型式—実用の移動式カマドに類似し、その変遷に合うもの。

図11　湖西地域の古墳群（大崎1987より）

これらは各部の把手や突帯の有無、大きさといった特徴でさらに細分が可能である。太鼓塚古墳群、穴太飼込古墳群、大通寺古墳群、福王子古墳群出土品をもとにＡ～Ｃ型式をそれぞれ２つに細分した。

ＡⅠ型式－移動式カマドを最も省略した型式。

ＡⅡ型式－移動式カマドを省略し掛口を模す型式。

ＢⅠ型式－突帯を施した型式（注４）。

ＢⅡ型式－移動式カマドの機能を備えた型式。

ＣⅠ型式－移動式カマドを全体的に模す型式。

ＣⅡ型式－移動式カマドを模し、脚がつく型式。

具体的な形態上の特徴は後で述べるが、分類の結果、近江出土のものが60％を占めるということ、また炊飯具形土器自体がバラエティーをもつことから、湖西地域より出土例の少ない河内・大和といった地域の古墳出土のものの多くにあてはめることが可能である。

次に相互に分類を検討した後、共伴する出土須恵器をもとに時期を決定し、編年案の組み立てを試みてみることとする（注５）。

この副葬時期の決定に際しては、松浦氏がいう最終追葬時に特別な意味をもたせたというものがあるが、炊飯具形土器と須恵器の共伴関係を吟味するとき、１石室１組を基本とすることや後にみる出土状況のあり方から、最終時より、むしろ第１次埋葬者に対する石室の構築と合わせた調度品的な副葬と考える方が好ましい。つまり行為者の最終追葬の確認を逐次おしはかるよりも、現段階では後でも述べるように初葬の方が合理的に解釈でき、初葬のときの石室構築、埋葬、供献という一連の造墓行為の流れで炊飯具形土器は持ち込まれているものと仮定することにした。

すなわち、ここでは出土須恵器の最も古いものを副葬時期として相対的な編年を行った。したがって、編年自体は各々の上限年代をさすことになる。

（３）型式分類と変遷と時期

全体的な型式分類と時期（図12左）

前項に分類した湖西地域の出土品を基本として大和・河内のものと整合性を確認しながら、全体の編年案におきかえるとともに、その都度、具体例を示す。

ＡⅠ型式

ＡⅠ型式は移動式カマドを最も省略・儀器化したものである。体部が直線的なもの、また一連の作業で一時に製作したと思われるもので、器高12cm以下の小型のものである。把手は太鼓塚３・５号墳でみられるが、それ以外ではつけられず、また庇をもたないものが多い。

代表例として穴太飼込４号墳出土のもがある。器高11.9cm、裾部径14.3cm、焚口の周囲に別作りの庇をつける付けものである。内外面にハケ目を施しており、突帯や把手はない。

６世紀第１四半期（MT15期）に一須賀Ⅰ－19号墳例などで出現し、６世紀第３四半期（MT85期）に最も多くみられる。この型式は初現期から衰退期まで継続してみられ、ミニチュアの炊飯具形土器の基本形態として不変的な系列となる。また炊飯具形土器の初現の１つであり、今のところ一須賀I－19号墳例はそれ以降の製作の基本になると考える。

ＡⅡ型式

ＡⅡ型式は移動式カマドの掛口を模したものである。体部上半が折れ曲がり、掛口の部分が丸みをもつ。把手はみられない。

代表例として、太鼓塚C－２号のものがある。器高14.4cm、裾部径20.6cm、付け庇である。内外面にハケ目を施し、突帯や把手はみられない。

存続時期は６世紀第２四半期（TK10期）に一須賀ＷＡ－11号墳で出現し、６世紀第４四半期（TK43期）に最も多くみられる。

ＢⅠ型式

ＢⅠ型式は筒形の形状をベースに胴部の中ほどに水平方向に突帯を施すものである。また把手がつき、器高が20cm前後と大きい。

代表例として、太鼓塚22号墳出土のものをあげる。この土器は、器高21.2cm、裾部径17.0cm、付け庇で胴部中央よりやや下に貼り付け突帯がめぐる。内外面ともに丁寧なハケ目が施されており、把手は上向きの角状のもので、突帯の一部に付く。太鼓塚７号墳例も共通するが、一須賀ＷＡ－６号墳はそうではない。嶽古墳例は突帯がつくものの把手はつかない。この古墳は近江では単独墳からの唯一の出土例であることも注目される。ただし時期が下るTK43期からは把手がつく。この変化はＡⅡ型式の影響を受けたためではないかと考える。

この型式は大和での出土例がなく、６世紀第３四半期（MT85期）に嶽古墳で出現し、６世紀末～７世紀初頭（TK209期）に最も多く見られる。時期が下るにつれて、庇などがよりしっかりしたものになる。

ちなみに、実用の移動式カマドで突帯を施すものは、６世紀前半、大阪府堺市陶邑と近接した万町北遺跡や京都府下植野南遺跡でみられる。

ＢⅡ型式

ＢⅡ型式は移動式カマドの機能を模したものである。庇・把手を伴い、またコシキの孔の数も多孔など移動式カマドのコシキの表現と共通する部分が多くある。

代表例として穴太飼込５号墳出土のものをあげる。器高15.1cm、裾部径20.6cm、付け庇で背面に煙孔を開ける。把手がつき、全体を指ナデで調整し、その後ハケ目を施す。また内面には削りが施される。

６世紀第３四半期（MT85期）に穴太飼込１号墳などで出現し、以降継続してみられる。時期が下がるにつれて、庇がしっかりしたものになる。

ＣＩ型式

ＣＩ型式は移動式カマドを模したものである。ハの字形に裾がひらく実用の移動式カマドに最も似ている。

例として一須賀ＷＡ－１号墳をあげることができる。器高16.8cm、器幅24.8cm、焚口上辺を外側に折り曲げる曲げ庇である。下向きの把手がつき、内面はカキ目がみられ、外面はナデ調整を行う。

６世紀第２四半期（TK10期）に穴太飼込３号墳で出現し、以降継続してみられる。この型式の移動式カマドは７世紀以降もあり、最も多くみられる。

ＣⅡ型式

ＣⅡ型式は移動式カマドを模したもので、底部の焚口下端に短い突出部（脚）がつく特徴的なものである。数は多くない。

太鼓塚Ｂ－２号は脚が両側壁下端に２本つくが、大通寺Ｃ－１号墳は脚が両側壁と背面下端に１本と計３本つくなどの若干の違いがみられる。

６世紀第１四半期（MT15期）に大通寺Ｃ－１号墳で出現し、以降継続してみられる。またこの型式も炊飯具形土器の初現の１つである。脚をつけた移動式カマドは６世紀中頃以降、鉄鍛冶で著名な大阪府柏原市大県遺跡などで多くみられる。

これらの型式分類には組み込まなかったが、釜口に釜を作りつける一体式のものがある。これは移動式カマドを最も省略したものであり、Ａ型式に含むことができると考える。また、把手を持つものと、持たないものがある。この形態のカマドは、大和巨勢山408号墳（TK10期）、河内一須賀Ｏ－５号墳（TK217期）など３例、近江大谷南８号墳など２例、計６例が確認できる。

各型式の地域性

この分類から、Ａ型式はどちらも河内一須賀古墳群と大和のものが、Ｂ型式はいずれも近江のものが初現形態であり、互いに影響しあうことが分かる。また、各地域で型式の有無がみられた。河内ではＣⅡ型式以外すべての型式が存在し多岐にわたる。しかし大和ではＡＩ・ＡⅡ・ＢⅡ型式のみに限られる。一方把手孔をもつものは大和のみでみられ、突帯を施しているものは近江と河内でみられる。河内のものは１例であり、ほとんどが近江出土のものである。

そして、卜部氏が指摘したように、把手孔や突帯は地域的特色であると追認できる〔卜部1991〕。藤原京から出土する移動式カマドも把手ではなく把手孔である。また脚を持つもの（ＣⅡ型式）は近江のみでみられ、これも地域色の１つであると考える。

時間的な変遷（図12）

次に須恵器の型式順を時期としておきかえて、それに炊飯具形土器の各型式の時間的変遷観に重点をおいて検討することとする。

MT15期

この期は今のところ炊飯具形土器の初現期である。近江の大通寺Ｃ－１号墳（ＣⅡ型式）、河内の一須賀Ｉ－19号墳（ＡＩ型式）、大和の桜井児童公園２号墳（ＡＩ型式）の３例である。

大通寺Ｃ－１号墳のものは器高37.9cm、一須賀Ｉ－19号墳のものは器高７cmと大型と小型がどちらも存在する。また大和・河内は同型式であり、まとまりをもつ。しかし、カマドの形態、コシキの孔の数などが違っており、両者は関係を持つとはいうものの、微細なところまで影響を与えるというほどのものではなかったと考える。

TK10期

この期では近江穴太飼込古墳群、太鼓塚古墳群でも副葬が始まる。ＡⅡ型式は河内一須賀古墳群や大和与楽古墳群でみられるものの、ＡＩ型式が多くを占める。しかし、まだ出土する古墳の数は少ない。

MT85期

この期ではＢＩ型式、ＢⅡ型式もみられるようになりバラエティーを増すが、依然としてＡＩ型式が主流を占める。そのＡＩ型式は太鼓塚古墳群のものに、ＢⅡ型式では穴太飼込古墳群のものに多くみられる。

TK43期

この期ではＣⅡ型式をのぞくすべての型式が出そろい、それと連動して炊飯具形土器の副葬が多くなる。そして今まであまりみられなかった大和・河内の地域での炊飯具形土器の副葬が増加する。しかしＡＩ型式は反して減少し、変わってＡⅡ型式が増える。全体に個性と特徴が

みられ、いくぶん丁寧に大きく作られる傾向がある。

TK209期

この期は炊飯具形土器が最も副葬される時期であり終焉の時期でもある。炊飯具形土器の終焉の時期にもかかわらず、太鼓塚22号墳やナシタニ６号墳など、大型のものが存在する。

小　　結

以上のように時期別に型式の消長をみていくと、ＡＩ型式はMT85期に、ＡⅡ型式はTK43期に、ＢＩ型式はTK209期に盛行することがみてとれる。すなわち大きくはＡＩ型式→ＡⅡ型式→ＢＩ型式へと一連の流れをもつ。この移行は出土数が多い太鼓塚古墳群が主体的に形成していると言える。

また河内・大和は炊飯具形土器の初現形態でありながらTK43期まで炊飯具形土器の副葬はあまりみられない。TK43期以降は河内の一須賀古墳群、大和の与楽古墳群に加えて沼山古墳などの単独墳においても副葬が始まり、数が多くなる。

分類と時間的な推移は以上のように考えられ、大型から小型という変化よりも、簡略的な小型のミニチュアと呼ぶにふさわしいものから、バラエティーをまし、より具体化、大型化、波及する傾向のほうが強い。また全体的に型式変化の情報を共有することも分かった。

３．製作技法

器体が小さいということもあってか、今まで注目されてこなかった製作技法というものがある。

近江においては相当の個体差が認められる。先に行った型式分類に製作技法を加えてその差に着目したい。

まず接合断面が、外傾か内傾であるかによってカマドの製作技法を分けた。外傾接合断面が見られるものは、粘土紐を積み上げて円筒形の体部をつくり、焚口を穿けて庇や把手などをつける。もう１つの方は内傾接合断面が見られるもので、鉢形土器の基本単位を作り、底部に釜口を、そして焚口を開けそれを倒置する。すなわち、両者の接合断面は逆転することになり、２タイプをつくり出すことになる。

前者を形状から筒形成形、後者を鉢形成形とする。後者は一般的な鉢形土器製作の延長上でカマドになる。このことからすれば、通常の土器作りを行っていた集団がカマドに転用し製作したという見通しが得られる。一方、筒形成形は一般の土器製作ではあまりみられない形状であることから、通常のカマドの特殊性を意識した集団によって製作されたと予測される。

この所見をもとにして先の型式分類にこの両者をあてはめてみてみると以下のようになる。

ＡＩ型式、ＡⅡ型式ではほぼ鉢形成形がみられ、筒形成形は太鼓塚26号墳例のみにみられる。これは器高が23.0㎝と高いため筒形成形によったものと考えられる。ＢＩ型式は穴太飼込10号墳を除いて、すべて筒形成形である。ＢⅡ型式はMT85期までは鉢形成形で製作していたがTK43期から筒形成形へと移行する。大きくみると、MT85期までは鉢形成形しかみられず、TK43期から筒形成形が出現することが分かった。

こうした傾向に基づいて一定量が出土する古墳群内において、その様相の変化を考えてみたい。

近江の穴太飼込古墳群はＡⅡ型式以外すべての型式をもつが、すべて鉢形で成形される。TK43期以降も筒形成形はみられない。太鼓塚古墳群はMT85期までは鉢形成形のものがみられ、TK43期では筒形・鉢形成形ともに存在するが、TK209期では筒形成形のみになる。

河内の一須賀古墳群はTK43期から２つの製作技法が存在する。

大和の与楽古墳群はTK10期からTK209期まで鉢形成形のものがみられ、筒形成形はTK209期からみられる。ナシタニ６号墳ではカマドが２点出土しており、ほぼ同時期に副葬されたと考えられるがその製作技法が異なるという特徴がある。また他の大和の古墳・古墳群では、巨勢山408号墳を除いてすべて筒形成形である。しかし、筒形成形はTK43期以降に限られる。

小　　結

以上のことから、古墳群内でも２つの製作技法が存在するもの、また１つだけの製作技法しか存在しないものがあるなどの違いがある。太鼓塚古墳群のように、鉢形成形から筒形成形への変化をみてとることができる例もあるが、一須賀古墳群のように、２つの製作技法が同時期に存在している例もある。また、近江では炊飯具形土器の初現期（TK10期）から炊飯具形土器を製作していた型式（ＡＩ型式）、その流れを汲んだ型式（ＡⅡ型式）では、鉢形成形を行っており、筒形成形の影響を受けたオリジナルの型式（ＢＩ・ＢⅡ型式）では移動式カマドの影響も受けるものが多くみられる傾向がある。大和・河内では筒形成形で成形されたＡＩ型式が存在するなど、近江とは異なる傾向がある。ただしその筒形成形もTK43期以降であり、全体の流れに反することはない。また近江の成形の基本はまず一般的な鉢形成形であり、

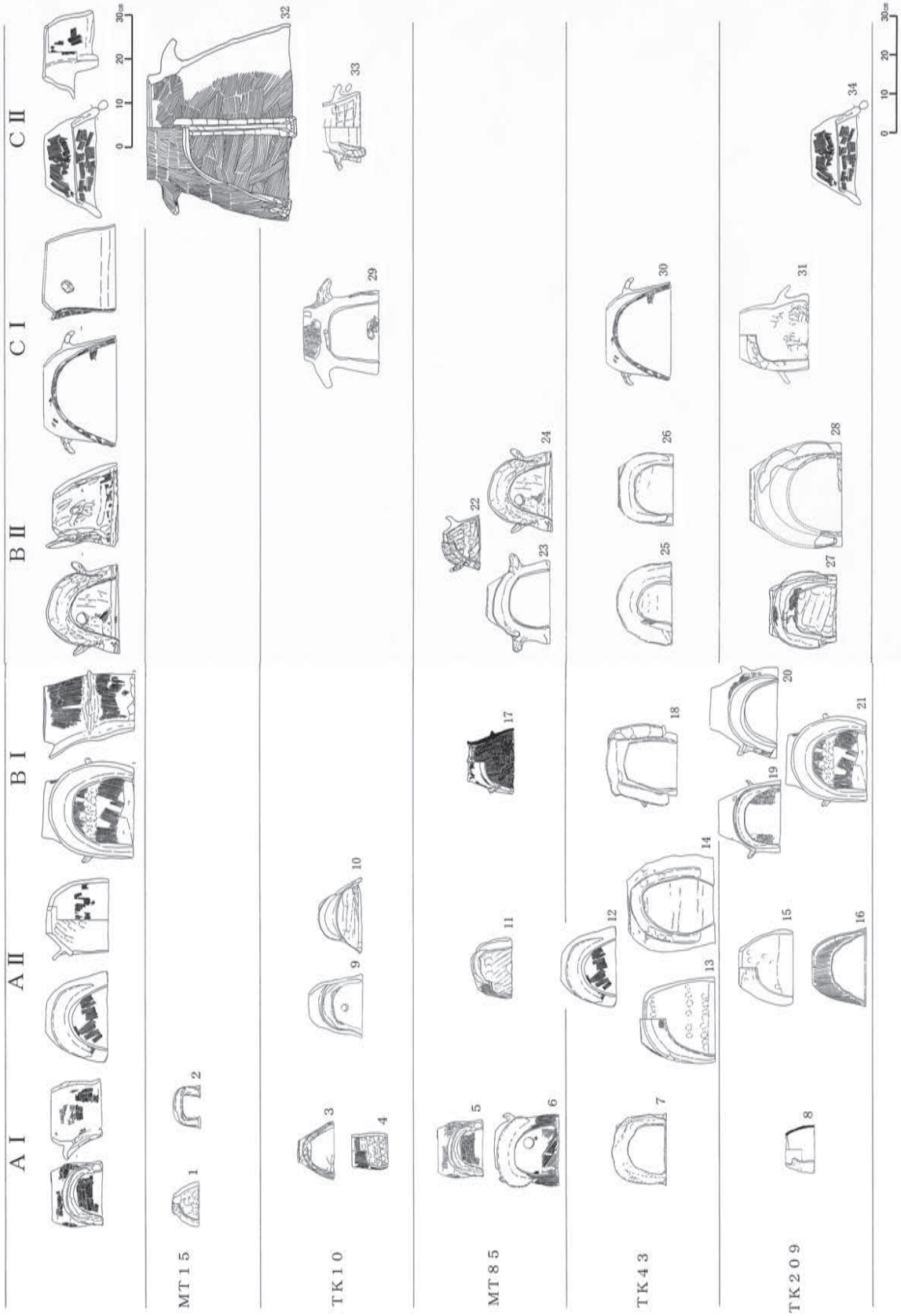


図12　炊飯具形土器（カマド）変遷図（図中の番号の古墳名は注末を参照されたい）

そこに筒形成形の影響を受けるという傾向を導きだせる。

分類を中心にみるならば、近江に限られるが、ＡＩ・ＡⅡ型式の埋葬用に作られたオリジナルの型式のものを製作したグループは、ミニチュアの儀器化したものが伝統的に守られ、一定の集団系譜が看取され、保守的なグループだった。すなわち、他の型式では筒形成形に移行するにもかかわらず、MT15期からTK209期まで一貫して鉢形成形でカマドを製作したことになる。

製作技法を検討して集団差をつかむことができたが、さらに土器をとりまく他の属性との関連性の有無を次に考えていきたい。

４．副葬位置

先にみた型式による集団の特質が、古墳石室の葬送儀礼にどのように関係するのか考えることにする。

まずは近江出土の炊飯具形土器の副葬位置について検討し、その傾向をみる（図13）。

近江で現位置を保って炊飯具形土器が出土すると考えられるのは、福王子２号墳・同19号墳、穴太飼込５号墳、太鼓塚３号墳・同５号墳・同16号墳があげられる。太鼓塚３号墳では、玄室に約１ｍ入った左側壁に沿った場所から、カマドにカマを重ねた状態で出土する。玄室の平面形態に違いがあるが、これらの石室の出土位置は玄室に入ってすぐ右の左側壁付近に置かれるという共通性をもつ。撹乱された石室でも羨門付近で破片となって出土するものも多いことから、もともとは玄室内入ってすぐのところに置かれたと考えられる。

この炊飯具形土器の副葬について河内・大和での出土例を検討すると、まず大和では少し奥壁側によるものの

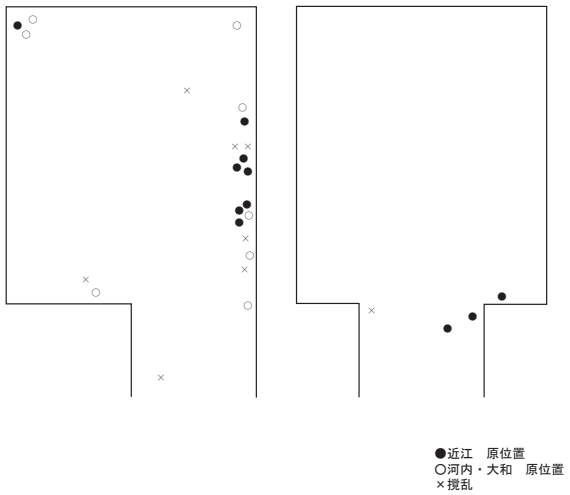


図13　石室内炊飯具形土器出土位置

ナシタニ１号墳がある。そして上５号墳、沼山古墳などが原位置を保つと考えられる。ともに玄室入ってすぐの左側壁側に置かれ、近江と共通する。河内ではより出土原位置を示す良好な資料が少ないが、大谷２号墳をあげる。石室入り口の袖部付近で出土し、これも近江と共通すると考える。

炊飯具形土器は他の土器類とは離れた位置から出土することが多く、他の土器類とは全く区別して副葬される空間が存在したと考えることができる。しかし、上記とは異なった場所から出土する古墳もある。それは一須賀Ｏ－５号墳・石田１号墳などである。これらは他の土器類とまとまって出土することや、奥壁隅などの追葬時の棺体配置場所の奥にあたるところから出土することから、全体の傾向から推測すると、追葬時の石室内の整理によって移動されたものと考えられる。この行為順であれば、冒頭にかかげた仮定の炊飯具形土器の配置が初葬時であったことの根拠となる。

こうした出土状況をみると、結果として袖形態の違いがあるものの、近江、河内、大和で副葬位置から共通した葬送儀礼が行われていたことになる。

５．近江の石室形態

次に炊飯具形土器を副葬する石室を対象として、石室形態について検討したいと思う。

袖形態は右片袖式・両袖式どちらも存在するが、多くは右片袖式である。中でも大和のものは右片袖式のみである。河内のものは３例だけが両袖式であり、大半がやはり右片袖式である。それに対し近江では、右片袖式が主流を占めるが両袖式が35％も存在し、大和・河内と比べて目立つ。時期的には右片袖式がMT15期からMT85期に多くみられ、TK43期に少なくなるが、TK209期に再び多くなる。両袖式はMT85期から徐々に多くなり、TK209期に最も多くみられる。TK209期には右片袖式と両袖式はほぼ同じ比率で存在する。

次に近江の古墳群の玄室平面プランを例にとって検討してみる（図14）。

穴太飼込古墳群において炊飯具形土器が副葬され始めるTK10期は、玄室幅：玄室長が１：1.5や１：1.7の縦長の石室プランである。その縦長傾向はTK209期まで続く。しかし、TK209期には１：1.1のほぼ正方形の石室にも炊飯具形土器が副葬される。

太鼓塚古墳群については、穴太飼込古墳群と同じくTK10期から副葬をはじめる。TK10期のものについては

数値化ができないが縦長の石室である。次のMT85期では、１：２もしくは１：1.5の縦長のもののみである。しかし、TK43期からは１：1.5の縦長のものに加えて、１：１の正方形石室への副葬が確認できる。TK209期では正方形・縦長に加えて、0.8：１の横長のものもみられる。

大通寺古墳群は、出土数が少ない上に年代決定が難しく、２基のみの検討になるが、MT15期から副葬が始まり、0.8：１の横長の石室プランである。そして、TK209期は１：1.2とやや正方形のものになる。

福王子古墳群も出土数が少ないが、MT15期に１：1.2の正方形に近いものがみられるものの縦長の系統であり、MT85期には１：1.3や１：1.8といった縦長の石室がほとんどである。

各古墳群で個性的なばらつきがあるが、以上をまとめると、大通寺古墳群の石室プランは畿内の変遷（注７）にのらず、一貫して独自の正方形プランの石室であったと考えられる。しかし福王子古墳群は縦長系統の石室であり、１：２を主流とする畿内の横穴式石室の変遷にのる。太鼓塚古墳群と穴太飼込古墳群ははじめ畿内に影響を受けた縦長の石室であった。しかし、前者は縦長の石室を持ちつつも新しくなってTK43期に、後者はTK209期に正方形が再出現する。この石室形態の変遷は炊飯具形土器が出土しない古墳も同様である。

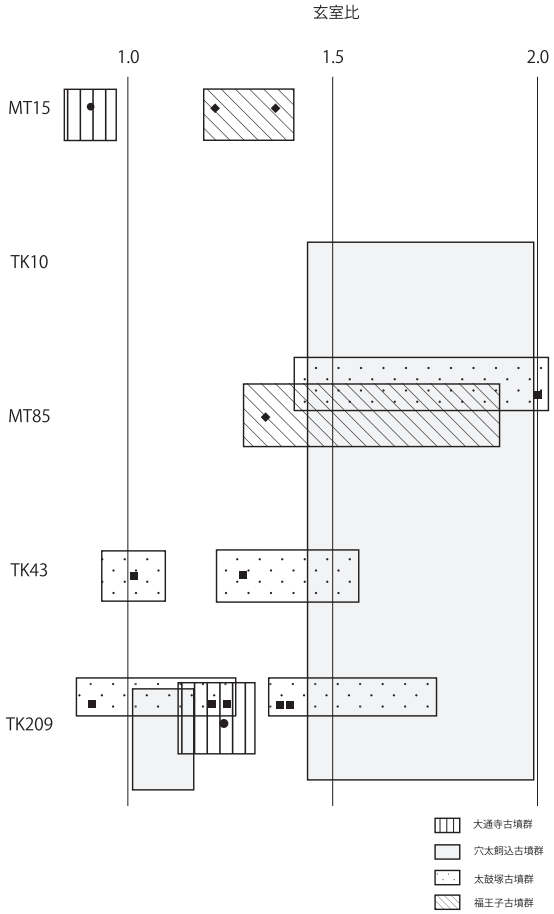


図14　炊飯具形土器出土石室プラン変遷図

したがって、ここでもTK43期という画期を求められるのではないかと考える。つまりTK43期から近江の独自性＝正方形プランが出現するということになる。穴太飼込古墳群はTK209期になるが、MT85期まで畿内勢力に影響を受けたが、TK43期からその影響が弱くなり、独自性を再度主張できるようになったのではないかと考えられる。

この正方形プランの地域差については、すでに水野氏や花田氏が論及している（注７）が、必ずしも古いものに限らず、全段階に及ぶことが分かる。

６．各古墳群の比較・検討

ここでは近江・河内・大和の各古墳群の差異と繋がりについて検討する。そのため、まず全体の様相が分かる大和・河内の古墳群について述べ、その後、近江と比較することにする。

与楽古墳群の様相

奈良県高取町に所在し、約210基の古墳から成り、８基が調査される。８基中６基から炊飯具形土器が出土し、副葬率は75％と高い。大和の中でもこうした高率はこの古墳群のみである。主な副葬品として馬具、銀製釵子、銀環、耳環があげられる。そして箱式石棺を用いる古墳もある。またナシタニ２号墳では焼葬が行われ、５・６号墳では石室内で焚火を行う。焼葬は全国的にみてもほとんど確認されていない。石室は右片袖式のみであり玄室の平面プランは、正方形のものが１例のみで、他は１：1.5～1.8の縦長のものである。

一須賀古墳群の様相

大阪府河南町東山・太子町葉室に所在し、約260基の古墳から成り、103基が調査され、炊飯具形土器は15基の古墳で確認される。主な出土品は馬具、金環、銀製釵子、銀製指輪などがあげられる。また組合式家形石棺を用いる古墳が多いのも特徴である（注８）。石室プランはすべて縦長であり、玄室比は１：1.6～１：1.9のものが主流を占める。袖形態は片袖式が主流で両袖式が２例のみある。中でも左片袖式のものも３例含むが、他の古墳群ではみられないということは本古墳群の特徴である。

石室形態

以上をふまえて先に検討した結果とともにまとめる。

石室形態では、近江のものは右片袖式が多数を占める

が、両袖式も35％存在する。そして近江の中でも右片袖式のみに炊飯具形土器の副葬が限られる古墳群も存在する。大和では右片袖式に限っての副葬である。河内では右片袖式がほとんどであり、両袖式は15％と少ない。

そして玄室の平面プランにおいては、河内ではすべて縦長であり、玄室比1.5〜1.9のものがほとんどである。大和では河内と同様ほぼ縦長であり、玄室比1.4〜1.8のものが多く、ナシタニ２号墳のみが正方形である。それに対して近江では縦長のものが多くみられるが、正方形・縦長のものもあり、正方形は20％と他地域と比べ多い特徴がある（図15）。ただし全体的にみて、炊飯具形土器が出土する石室は正方形気味である。

副葬品

副葬品においても各地域の特徴を見出すことができる。大和の古墳からは、釵子・馬具の出土が多い。それに対して河内では指輪や金環の出土が多いという特徴がある。また組合式石棺が使用される古墳が40％と他地域と比べて多い。近江では大和・河内のような特徴的な遺物の出土はほとんどなく、大通寺古墳群での馬具の出土といったものと、太鼓塚古墳群における銀製・青銅製の腕輪、金・銀環の出土をあげるくらいである。しかし、この古墳群は他の炊飯具形土器が出土する古墳群と比べても炊飯具形土器や耳環などの出土の数は多い。また組合式石棺が使用されているのは、大通寺Ｃ－２号墳のみであり、ほとんどが組合式木棺である。

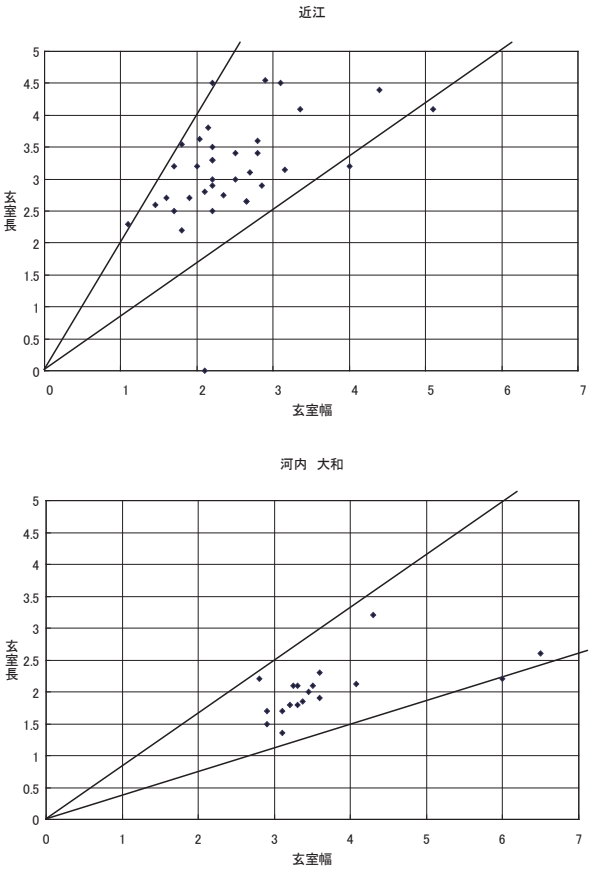


図15　各地域の炊飯具形土器出土石室形態

炊飯具形土器

以上のように各地域での古墳群間の差や特徴を見出すことができた。次に炊飯具形土器によって古墳群間の関係をみてみたい。

大きくみると同時期、同型式に炊飯具形土器が存在している古墳の組み合わせは、大和と河内、河内と近江であり、大和と近江という組み合わせは存在しない。また、大和と河内の組み合わせは炊飯具形土器の初現期からみられるが、河内・近江の組み合わせはTK43期のみに限られる。検討できる資料は少ないが、河内の一須賀ＷＡ－19号墳と近江の穴太飼込４号墳のものは同じＡＩ型式であり、調整方法や製作技法に違いがみられるものの器高が11cm前後で体部が直線的であること、また庇の付け方、焚口の形態がほとんど同じである。離れた地域間でこれほど類似する形態のものが出土するということは、相互に共通性を求めることができる。

また近江の古墳群の中でも同形態のものがみられる。穴太飼込10号墳と太鼓塚12号墳・同32号墳などである。庇が焚口の周りを全周し、突帯をめぐらす。ほぼ同時期に突帯を施すという影響を受けることからも互いに情報を共有していたと考えられる。全体的にみてカマの形状、コシキの孔の数などでもその類似性をみてとることができ、穴太飼込古墳群と太鼓塚古墳群は近江のなかでもより繋がりが深かったと推測できる。

そして時期が不明なため分類には組み込まなかったが、大和でのオイダ山古墳と笛吹遊ヶ岡古墳のカマドは器高が少し大きいが体部が直線的であり、ＡＩ型式に属する。庇の付け方、煙孔を有するなどの形態が似ており、ここでも古墳間の強い結びつきをうかがうことができる。

７．各地における炊飯具形土器の消長とその意義

各地域の繋がり

出現当初、近江では独自の形態で炊飯具形土器が作られ始め、河内と大和は繋がりを持ちつつも独自の変遷をたどった。それは、近江の初現形態のものがＣⅡ型式であり、河内・大和と別型式のものであることや、器高が40cmと移動式カマドとしても利用できそうなものを副葬するといったことからもみてとれる。それに対して、河

内と大和では形態が少し異なるものの、ＡＩ型式を軸にして存在すること、そして初現形態は小型が主体であり、コシキの孔の数が多孔式であることからも共通性がある。そして時期が不明なため断定はできないがMT85期～TK43期にかけて、一須賀ＷＡ－６号墳や嶽古墳にみられる突帯など、同形態のものや情報の共有がみられることから、この時期により密接な繋がりがあったと考えられる。

画　期

炊飯具形土器の型式にバラエティーが多くみられるようになるのは、６世紀第４四半期（TK43期）である。この時期はＡⅡ型式の出土数が多くなり、またＢＩ型式が出現するなど、すべての型式がでそろう。

この時期は、群集墳が多く造られるようになる時期と重なる。広瀬和雄氏は、６世紀後葉に大和政権から家父長世帯に造墓を認め、これを大和政権の地域支配の新たな方式の採用であったとして、ここに画期を求めている〔広瀬1978〕。炊飯具形土器についてもすべての型式がでそろうTK43期にこれをあてることができる。

とすれば、群集墳の増加に連動して炊飯具形土器も地域が拡大して作られるようになり多様性を持った結果、多種多様な型式が生み出されたのではないだろうか。

この画期は製作技法でも認めることができる。炊飯具形土器の初現期（MT15期）には土器作りと連動したと考える鉢形成形で製作されたが、TK43期、つまり群集墳の急激な増加が伴ったTK43期には筒形成形がみられるようになる。これは今まで製作を行っていなかった集団の参入があったと考える。ただし、その型式の範囲はＡＩ・ＢＩ・Ⅱ型式に限られるようである。

近江の独自性

近江において古墳群間で石室形態に正方形のものや縦長のものといった差がみられた。特にMT85期に畿内の強い影響を受け縦長系統であったが、表に示すように、畿内の玄室プランに多い１：２の縦長の石室はない。そしてMT85期を除くと、近江は終始正方形プラン志向が強い地域だったと言える。

近江の古墳群について、水野正好氏は正方形平面の特徴から漢人系氏族の墓域と考えていたが、その墓域において実態としては正方形平面より長方形気味の平面のもののほうが多く見られることが分かる。正方形のものは後のTK209期にも見られることから、正方形のものをもって古いとは言えず、地域性が内在する。ただし、このことは近江にとって正方形の石室が終始根強い伝統的な形態であったことを示している。

8．まとめ

本論では炊飯具形土器の型式分類を行い、その変遷を記した。そして、副葬品や石室形態も合わせて考察した。それにより各古墳群の差異や繋がりについて提示することができた。加えて炊飯具形土器の変遷や製作技法の検討などを行うことで、造墓の拡大と炊飯具形土器の盛行が連動するTK43期に画期を求めることができることも示した。しかし、炊飯具形土器を副葬する古墳と副葬しない古墳の違いの検討や出自系譜としたものについては今後の課題にしたい。

本論の作成にあたっては、吉水眞彦氏にいろいろと御教示を賜わりました。感謝致します。

注

（１）古墳出土の炊飯具形土器を「ミニチュア炊飯具（形土器）」と呼ばれていることが多いが、実際には大通寺３・５号墳のように実用のカマドと大きさがあまり変わらないものも出土しているため、本論では炊飯具形土器と称する。

（２）本論では坂本～錦織地域の古墳・古墳群を志賀古墳群とする。

（３）太鼓塚古墳群の未報告の資料については、大津市埋蔵文化財センターで実見した。本文では＊を付けて提示している。遺物は大津市埋蔵文化財センターに保管収蔵。

（４）埋葬用の形態変化に連動しているかは不明。

（５）須恵器編年は、田辺昭三氏の1966『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ、1981『須恵器大成』角川書店をもとにした。

（６）白石太一郎氏は玄室を指数化し（玄室長÷玄室幅）、６世紀前半までは玄室巾指数が52以上の正方形に近い平面プランの石室が多く、６世紀後半からは51以下の長方形の玄室に変化するとる〔白石1966〕。

（７）水野正好氏は他地域から墓域を与えられた集団と、元来近江に居住していた集団の差ではないかと述べる〔水野1970〕。花田勝広氏は、長方形・方形の石室プランが多いことから、本拠地に帰葬するが故にミニチュア炊飯具を副葬品として用い、長方形・方形の造墓をなすことができたと理解したいとし、造墓は本拠地帰葬の場合統括氏族の造墓の規制を受けるのが基本となるものと解されると述べる〔花田1993〕。

（８）二上山の西に近接する河内の一須賀古墳群、切戸２号墳、奉献塔山２号墳からはともに石棺を使用するが、東に近接する大和の古墳・古墳群では石棺の使用はほとんどみられない。

＊図12の番号はこの古墳名と一致する。１一須賀Ｉ－19号墳、２桜井児童公園２号墳、３穴太飼込11号墳、４穴太飼込15号

墳、５穴太飼込４号墳、６太鼓塚５号墳、７沼山古墳、８石田２号墳、９一須賀ＷＡ－11号墳、10ナシタニ１号墳、11ナシタニ５号墳、12太鼓塚Ｃ－２号墳、13一須賀Ｑ－１号墳、14太鼓塚26号墳、15一須賀Ｑ－９号墳、16ナシタニ６号墳、17嶽古墳、18一須賀ＷＡ－６号墳、19穴太飼込10号墳、20太鼓塚32号墳、21太鼓塚塚22号墳、22福王子19号墳、23穴太飼込１号墳、24穴太飼込５号墳、25・26上５号墳、27ヲギタ２号墳、28ナシタニ６号墳、29穴太飼込３号墳、30一須賀ＷＡ－１号墳、31一須賀ＷＡ－20号墳、32大通寺Ｃ－１号墳、33穴太飼込11号墳、34太鼓塚Ｂ－２号墳である。

＜引用論文＞

卜部行弘　1991「その他　土製品」『古墳時代の研究』８ 古墳Ⅱ副葬品　雄山閣

小林行雄　1976「黄泉戸喫」『古墳文化論考』平凡社

近野正幸　1990「古墳出土の炊飯具形土器について－黄泉戸喫小考（１）－」『神奈川考古』第26号　神奈川考古同人会

白石太一郎　1966「畿内の後期大型群集墳に関する一考察－河安高安千塚及び平尾山千塚を中心として －」『古代学研究』42・43合併号 古代学研究会

田辺昭三　1966『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ
1981『須恵器大成』角川書店

花田勝広　1993「渡来人の集落と墓域」『考古学研究』第156 号

広瀬和雄　1978「群集墳論序説」『古代研究』15号　元興寺文化財研究所　考古学研究室

松浦俊和　1984「ミニチュア炊飯具形土器論」『史想』第20号 京都教育大学考古学研究会

水野正好　1970「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財報告書』第４冊　滋賀県教育委員会

＜参考文献＞

稲田孝司　1978「忌の竈と王権」『考古学研究』第25巻第１号

大橋信弥　2004「近江における渡来氏族の研究－志賀漢人を中心として－」『古代豪族と渡来人』吉川弘文館

大崎哲人　1987「大津市北郊後期古墳の再考」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要』２ 滋賀県埋蔵文化財センター

岡田圭司　2004「古墳出土の炊飯具形土器」『地域と古文化』『地域と古文化』刊行会

近澤豊明　1992「竈形土製品について」『長岡京古文化論叢』Ⅱ　中山修一先生喜寿記念事業会

島田秀俊　1977「大津北郊の後期古墳群について」『陵』第３・４合併号　仏教大学考古学研究室

白石太一郎　1975「ことどわたし考」『橿原考古学研究所論集』創立35周年記念　吉川弘文館

関川尚功　1988「古墳時代の渡来人－大和・河内地域を中心として－」『橿原考古学研究論集』第９号　橿原考古学研究所

花田勝広　2005「古墳時代の畿内渡来人」『大和王権と渡来人』日本考古学協会

埋蔵文化財研究会　1992『古墳時代の竈を考える』第１分冊

松浦俊和　2001「ミニュチュア炊飯具を考える」『韓国より渡りて－古代国家の形成と渡来人－』滋賀県立安土城考古博物館
2002「大津北郊の後期古墳群とミニチュア炊飯具形土器－群集墳の支群構成とその性格について－」『田辺昭三先生古希記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会

水野正好　1992「後期群集墳と渡来系氏族」『古代を考える近江』吉川弘文館

吉水眞彦　1992「群集墳群構成のあり方について近江湖西地域南部の群集墳を事例として」『近江の考古と歴史』西田弘先生米寿記念論集会

＜古墳・遺跡に関する参考資料＞

穴太飼込古墳群：2004『出土文化財資料化収納業務報告書』Ⅰ　滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
：2006『穴太飼込古墳群』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

石田１号墳　：1985「石田１号墳」『奈良県文化財調査報告書』第44集 奈良県教育委員会

一須賀古墳群　：1984『一須賀・葉室古墳群』大阪府教育委員会
：1992『一須賀古墳群資料目録』Ⅰ　（実測図）大阪府教育委員会
：1993『一須賀古墳群Ⅰ支群発掘調査概要』大阪府教育委員会

大県遺跡　：1984『大県・大県南遺跡』柏原市文化財概報1983－Ⅲ　柏原市教育委員会

大県古墳群　：1998『平野・大県古墳群』柏原市文化財概報1997－Ⅲ　柏原市教育委員会

大谷古墳群　：2001『羽曳野市内遺跡調査報告書―平成４年度―』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書40　羽曳野市教育委員会

大谷南古墳群　：2005『出土文化財資料化収納業務報告書』Ⅱ－１ 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

上５号墳　：2003『上５号墳』奈良県文化財調査報告書第92集　奈良県立橿原考古学研研究所

切戸２号墳　：1985『古市遺跡群』Ⅵ　羽曳野市埋蔵文化財調査報告書10　羽曳野市教育委員会

嶽古墳　：1982『大津市坂本町嶽古墳調査概要』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会

勘定山古墳　：1981『1979年度奈良県遺跡調査概報』第１分冊　奈良県立橿原考古学研究所

熊ヶ谷古墳群　：1987「湖西地域南部における群集墳の構造と系譜」（上）『古代学研究』第113号
「湖西地域南部における群集墳の構造と系譜」（下）『古代学研究』第114号

巨勢山古墳群　：2005『巨勢山古墳群』Ⅴ　御所市文化財調

査報告書第28集　御所市教育委員会
小山古墳群　：1982『滋賀里・穴太地区遺跡群発掘調査報告書』大津市教育委員会
桜井児童公園２号墳：1959「桜井児童公園の古墳」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』奈良県教育委員会
：関川尚功1988「古墳時代の渡来人－大和・河内地域を中心として－」『橿原考古学研究論集』第９号　橿原考古学研究所
下植野南遺跡　：1996『下植野南遺跡』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第13集　大山崎町教育委員会
太鼓塚古墳群　：1980『滋賀里・穴太地区遺跡群発掘調査報告書』大津市教育委員会
：1992『太鼓塚遺跡発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財調査報告書19　大津市教育委員会
大通寺古墳群　：1995『大通寺古墳群』財団法人滋賀県文化財保護協会・滋賀県教育委員会
沼山古墳　：1985『沼山古墳益田池堤』奈良県文化財調査報告書第48集　奈良県立橿原考古学研究所
福王子古墳群　：1981『榿木原遺跡発掘調査報告書』Ⅲ　滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
：1985『昭和60年度滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会
：1969「福王子古墳群発掘調査報告」『滋賀県文化財調査報告書』第４冊　滋賀県教育委員会
奉献塔山２号墳　：1994「奉献塔山古墳群」『羽曳野市史』第３巻　羽曳野市教育委員会
万町北遺跡　：1993『万町北遺跡』Ⅰ　和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書Ⅴ　和泉丘陵内遺跡調査会
与楽古墳群　：1987『与楽古墳群』奈良県文化財調査報告書第56集　奈良県立橿原考古学研究所

ふりがな	きょうとたちばなだいがく　ぶんかざいちょうさほうこく
書名	京都橘大学 文化財調査報告 2007
副書名	牧野車塚古墳・熊ヶ谷３・４号墳
巻次	
シリーズ名	京都橘大学　文化財調査報告
シリーズ番号	2
編著者名	一瀬和夫　青井美稚子　堂ノ本智子　高橋裕子
編集機関	京都橘大学　文学部文化財学科
所在地	〒607-8175　京都市山科区大宅山田町34　TEL. 075-571-1111
発行年月日	2008年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
牧野車塚古墳（まきのくるまつかこふん）	大阪府枚方市小倉東（おおさかふひらかたしおぐらひがし）	27210	141	34° 83′ 38″	135° 66′ 9″	2007年７月30日～2007年８月10日	12734㎡	学術調査
熊ヶ谷３・４号墳（くまがや）	滋賀県大津市滋賀里１丁目（しがけんおおつししがさと）	25210	210	35° 04′ 52″	135° 85′ 3″	2007年８月20日～2004年９月20日	33㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
牧野車塚古墳	古墳	古墳時代	—	—	（測量調査） 墳丘長 107.5m 後円部 径58m 前方部 幅45m
熊ヶ谷 ３・４号墳	古墳	古墳時代	溝、木棺直葬	板石	３号墳 円墳径 21m 高さ 2.2m ４号墳 円墳径 24m 高さ 3.6m

京都橘大学 文化財調査報告 2007
牧野車塚古墳・熊ヶ谷３・４号墳

発行　京都橘大学　文学部
〒607-8175　京都市山科区大宅山田町34　TEL 075-571-1111
発行日　2008年３月31日
印刷　㈲ 真陽社
〒600-8475　京都市下京区油小路仏光寺下ル　TEL 075-351-6034

京都橘大学
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY